石川県埋蔵文化財情報

第 43 号

巻頭図版（田岸遺跡　一針Ｃ遺跡　古府シマ遺跡）

令和元年度の発掘調査から …… 所長　伊藤雅文 …（1）

発掘調査略報

田岸遺跡（七尾市） ……（6）

酒井バンドウマエ遺跡（羽咋市） ……（8）

西任田遺跡（能美市） ……（10）

一針Ｃ遺跡（小松市） ……（12）

古府シマ遺跡(小松市) ……（16）

庄・西島遺跡（加賀市） ……（18）

弓波遺跡（加賀市） ……（22）

令和元年度下半期の出土品整理作業 ……（24）

令和元年度環日本海交流史調査研究集会の記録 ……（27）

日本中近世の資源消費にかかる社会構造変化と技術変化 …… 山田昌久 …（27）

古代能登の挽物について …… 久田正弘 …（31）

古代北加賀における挽物容器の集成 …… 熊谷葉月 …（33）

当日の記録と資料検討会について …… 金山哲哉 …（37）

調査研究報告 ……（39）

漆町遺跡（金屋地区）における鋳物生産の把握に向けた視点と方法 …… 西田昌弘・川畑　誠 …（39）

北陸地方の九州型石錘と山陰系甑形土器について …… 久田正弘 …（51）

2020 年 9 月

公益財団法人　石川県埋蔵文化財センター

写真解説

田岸遺跡

調査地遠景（北から）

のと鉄道西岸駅から北へ約1.5kmの七尾湾を望む海岸段丘上に立地する縄文時代中期中葉の集落遺跡である。石囲炉や焼土を伴なう竪穴建物群が弧を描きながら配置されており、集落の様相が分かる成果が得られた。

ＳＩ３出土の縄文土器と土偶

縄文時代中期中葉の多量な土器・石器・土偶が出土した。上山田式土器は竹を半分に割ったような工具で、文様が斜め方向に描かれている。

土偶は頭部と腕と脚部が欠けているが、大きく張った腹部に両手を添えており、生命を宿した妊婦の姿を表現している。

調査地遠景（北から）

ＳＩ３出土の縄文土器

土偶

写真解説

一針Ｃ遺跡

遺跡遠景（西から）

小松市北部の梯川中流域右岸に広がる集落遺跡である。梯川の河川改修事業に伴い、改修前の堤防地点、河川敷を調査した。３つの遺構面を調査し、弥生時代から中世にかけての集落跡・館跡などを確認した。

銅製三具足出土状況（香炉・燭台）

上・中層で調査した中世の井戸（Ｍ区 SE01）から、銅製三具足が出土した。三具足とは香炉・花瓶・燭台を一組とした仏具で、県内の発掘調査での出土は２例目となる。三具足は、香炉の片方の耳が失われているが、ほかは完形で、保存状態も良好である。

遺跡遠景（西から）

銅製三具足出土状況（香炉・燭台）

写真解説

古府シマ遺跡

3-4 区・3-5 区全景（上空から）

通称「タチ」地区の上層遺構の検出状況。鎌倉～室町時代の掘立柱建物、柱穴、井戸、竪穴状遺構を多数検出した。

4-3 区全景（南から）

調査区は石部神社の南側にあたり、幅３ｍ近くの堀状遺構を検出した。堀状遺構は鎌倉～室町時代の間に掘削・埋没したようである。

3-4 区・3-5 区全景（上空から）

4-3 区全景（南から）

令和元年度の発掘調査から

伊藤雅文

はじめに

平成から令和に変わり、「平成」という語が過去のものという感覚になった。しかしながら、現実の生活は間断なく進んでいる。

令和元年度における開発に伴う緊急発掘調査は石川県全体として29件で、35,485㎡の調査が実施された。県教委から当財団に委託されて発掘調査（センター調査と略）を行なったのは、9件で22,300㎡、市町が調査主体（市・町調査と略）となったのは20件で13,185㎡である。センター調査は国・県関係の事業と北陸新幹線などの大規模事業、市町調査は該当市町事業及び民間開発を担当しているため、県調査1件あたりの面積平均が市町よりも大きい。また昨年度と調査面積を比較すれば微減となっているが、ほぼ横ばいといえる。

なお、学術調査や保存目的とした発掘調査は、6件で799㎡である。

1　石川県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査

9件の発掘調査を行なったが、山代イチマイヨリ遺跡と金沢城下町遺跡（小将町1番地点）の調査概要は、本誌42号（2020年3月刊行）に掲載したので、本書に掲載していない。

令和元年度発掘調査遺跡一覧

№	掲載遺跡	遺　跡　名	所在地	時　代	調査面積	事業者	事　業　名
28	○	庄・西島遺跡	加賀市庄町ほか	弥生～中世	8,580	国土交通省	一般国道8号改築（加賀拡幅）
3	○	酒井バンドウマエ遺跡	羽咋市酒井町	古代～中世	1,690		一般国道159号改築（羽咋遺跡）
22	○	一針C遺跡	小松市一針町	弥生～中世	4,400		梯川改修
23	○	古府シマ遺跡	小松市古府町	古代～中世	1,850		
20	○	西任田遺跡	能美市西任田町	弥生～中世	1,460	鉄道・運輸機構	北陸新幹線建設
27	○	弓波遺跡	加賀市弓波町	縄文～中世	660		
2	○	田岸遺跡	七尾市中島町田岸	縄文	2,340	土　木　部	国道改築 国道249号
29		山代イチマイヨリ遺跡	加賀市山代温泉	古代	720		都市計画道路　山代黒津線
11		金沢城下町遺跡（小将町1番地区）	金沢市小将町	近世	600		新東六駐車場整備

庄・西島遺跡の調査は5年目である。現国道に沿って細長い調査区の調査となっている。微高地と川跡・鞍部が交互に見られ、底部に絞り痕のある須恵器甕があり、初期須恵器の新たな資料の追加を見た。当遺跡における墨書土器も初出土である。酒井バンドウマエ遺跡は、今次で調査完了となった。これまで同様、上層では中世以降の川跡と水田を確認し、粗砂を埋土とする足跡が検出され、洪水によって埋まったことが分かる。下層では古代の掘立柱建物1棟を検出し、集落の広がりを確認した。一針C遺跡は中世の上層、古墳時代後期から中世を中心とする中層、弥生時代後期から古墳時代前期の下層からなり、極めて遺構が密集した状況で遺物も多く、なかなか調査の進捗を進めることができない。中層遺構では、室町時代の館跡や井戸、畝状遺構、水路状遺構が検出され、屋敷地が2重の堀となっていた。井戸から花瓶・香炉・燭台がセットになった銅製三具足がほぼ完形で出土した。方形区画溝と一体となった遺構なので、仏堂の可能性がある。古府シマ遺跡は、鎌倉・室町時代の上層面と平安時代の下層面を調査した。柱穴や井戸、大型土坑などが密集しており、遺物量も非常に多い。周辺に小字「タチ」があり、加賀国府との関連に注意しつつ、平安時代以降活発な人間活動を見て取

れる。

西任田遺跡は北陸新幹線本線に沿う道路の調査である。本線調査時の遺構の延長を確認した。弓波遺跡では弥生時代後期から古墳時代の掘立柱建物や古代の建物、古墳時代の土坑墓などを検出した。田岸遺跡は昨年度からの継続調査。縄文時代中期中葉の集落跡で、七尾湾際の海岸段丘に営まれ、可能性のあるものを含めて６棟の竪穴建物と掘立柱建物１棟が弧状に配置されていた。方形に組まれた石囲炉のある竪穴建物が４棟あり、特徴的である。これまで昭和32年と平成６年に発掘調査が実施され、今回の調査を合わせて集落の全体像が見えてきた。

なお発掘調査の現地での説明会は、8月25日（日）に古府シマ遺跡（参加者95人）、12月8日（日）に田岸遺跡（参加者110人）で行なった。特に能登で行なう現地説明会は近年なかったため、盛況であった。

2　市町が実施した緊急発掘調査

輪島市は１件の発掘調査があった。大釜１号塚跡には中世後半の板碑が建立されており、板碑倒壊埋没後、近世に礫を積み上げた構造であるとわかった。高爪山信仰に係る遺構の可能性が高い。

かほく市は１件の発掘調査である。夏栗Ｂ遺跡は平安時代の集落跡で、土坑などを調査した。

金沢市は８件の発掘調査があった。末窯跡群辰巳支群では丘陵裾部が調査対象となったため、須恵器窯本体は調査区にかからず二次的に動いた遺物が多数出土した。金沢城下町遺跡（安江町地区）は近世城下町の町屋跡にあたる。井戸やゴミ穴、建物礎石を検出したほか、元禄３年（1690）と宝暦９年（1759）の火災痕跡も確認できた。さらに、弥生時代後期から終末期の溝も検出し、集落の展開が予想される。

野々市市は２件の発掘調査があった。田尻ジッタ遺跡では中世の区画溝や竪穴状遺構とともに、戸室石製の石塔が出土している。末松遺跡では、奈良時代末から平安時代にかけての集落跡と中世の土坑や掘立柱建物を検出し、建物規模等から一般的な集落の様相と考えられる。

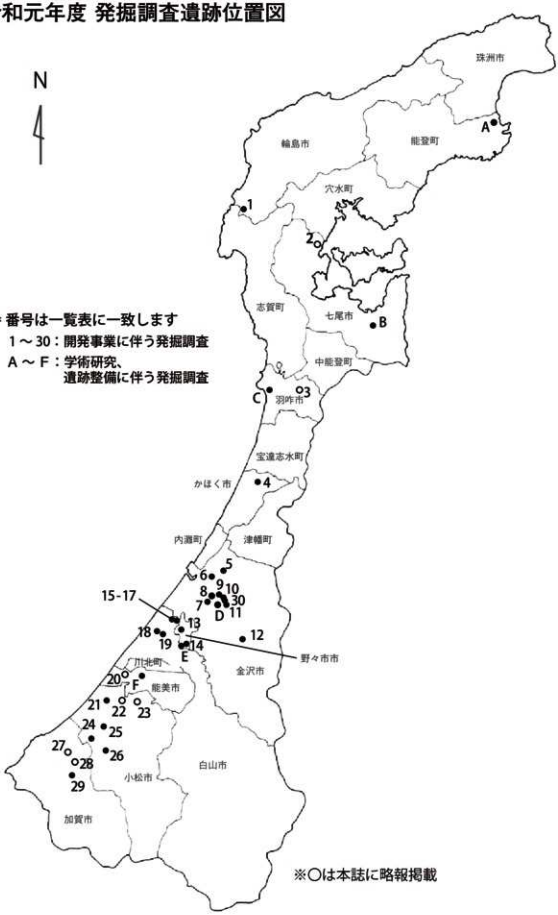
白山市は５件の発掘調査があった。区画整理事業による発掘で、横江町と北安田町に集中する。２件の横江古屋敷遺跡とも集落縁辺部の調査であった。横江Ａ遺跡は13世紀頃の土師器皿が館跡区画の可能性も考えられる溝から多く出土した。北安田南出ヌノハシ遺跡は平安時代の掘立柱建物等を検出したが、遺構密度は全般的に薄い。北安田南遺跡は弥生時代終末期の竪穴建物周囲に多数の廃棄土坑が見られたほか、古代の建物と畝溝が検出され、集落の空間利用のあり方を示す。

小松市は３件の発掘調査があった。平成16年度に県埋文で調査した矢田野３号墳東半分を調査しており、今回の市調査では西半分を調査し、６世紀後葉の築造と判明した。上荒屋オジマヤマ遺跡は奈良時代後半から平安時代に係る須恵器窯を調査した。そのうち１基が作り替えしていた。

3　遺跡整備等に伴う発掘調査

石川県金沢城調査研究所は、金沢城跡の「見せる石垣」の成立を調べるため、平成29年度から「切石積石垣確認調査」を行なっており、３年目になる。石垣基部を調査し、玉泉院丸に特徴的な「色紙短冊積石垣」が17世紀後半に普請され、接する納屋土蔵下石垣も同時に作られたことが分かった。羽咋市調査の柳田シャコデ廃寺では寺域を明確するための調査を行ない、東側の遮蔽施設（柵か）とおもわれる柱列を確認した。後世の削平等により塔跡以外の伽藍がよくわからない状態であったので、寺域を推定できる遺構が確認された意義は大きい。野々市市調査の末松廃寺では金堂北東隅の調査で、７世紀後半の創建時の瓦がたまった状態で検出された。能登町による旧松波城庭園調査は、平成28年から行なわれている。園地遺構と礎石建物を確認した。

令和元年度 発掘調査遺跡位置図



令和元年度　県内遺跡発掘調査一覧

◎開発に伴う緊急発掘調査

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積（㎡）	調査担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
1	大釜１号塚跡	輪島市門前町大釜					○	○	150	市
	２時期の塚跡を確認した。古段階は板碑が造立された時期で、中世と考えられる。新段階は板碑が埋没し、礫石が葺かれた段階で、近世以降の所産と判断される。									
2	田岸遺跡	七尾市中島町田岸	○						2,340	県
	縄文時代中期中葉の集落跡を確認した。石囲い炉を伴う竪穴建物の他に、大小様々な竪穴建物を検出した。建物群は帯状に配置されており、緩やかに弧を描きながら分布している集落様相が判明した。									
3	酒井バンドウマ工遺跡	羽咋市酒井町				○	○		1,690	県
	上層では、中世の集落跡を確認し、溝、土坑、小穴などの他に、水田を検出した。下層では、奈良・平安時代の集落跡を確認し、掘立柱建物、溝、小穴、川跡を検出した。									
4	夏栗Ｂ遺跡	かほく市夏栗				○			279	市
	古代の土坑を検出した。９世紀代の須恵器が出土した。									
5	南森本ホリハタ遺跡	金沢市南森本町		○	○	○			400	市
	柱穴や土坑のほかに区画溝と考えられる幅約２ｍほどの大きな溝を検出。土師器や須恵器などが出土した。									
6	千田西遺跡	金沢市千田町		○	○	○	○		640	市
	弥生時代の土坑、川跡、中世～古代の井戸、柱穴列、溝などを検出。弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器などが出土した。									
7	金沢城下町遺跡（長氏屋敷跡地区）	金沢市玉川町						○	480	市
	調査地は加賀八家の一つ、長氏の上屋敷に隣接する武家屋敷地で、三輪家の敷地内の一角に当たる。石列、土坑などを検出、陶磁器類や木製品などが出土した。									
8	金沢城下町遺跡（安江町地区）	金沢市安江町						○	1,130	市
	町屋跡で建物礎石、柱穴、ゴミ穴、火災片付け土坑などを検出。主に17世紀前半以降の陶磁器、土器、金属製品、石製品、木製品が出土した。									
9	金沢城下町遺跡（安江町12番地点）	金沢市安江町						○	18	市
	土坑３基、柱穴６基を検出。陶磁器、瓦が出土した。									
10	金沢城下町遺跡（袋町２番地点）	金沢市袋町						○	112	市
	調査地内は西外惣構の内側に位置し、町人地に当たる。石列や土坑を検出。陶磁器や、下駄などの木製品が多く出土した。									
11	金沢城下町遺跡（小将町１番地点）	金沢市小将町						○	600	県
	近世城下町の屋敷地を確認した。屋敷地を区画する石列、等間隔に並ぶ礎石列、植物腐植土の溜まった池状の窪み、桶を掘えた土坑などを検出した。17世紀の陶磁器、土師器、瓦、漆器椀、箸などが出土した。									
12	末寮跡群辰巳支群	金沢市辰巳町				○			1,060	市
	窯跡群が立地する丘陵裾部を調査した。須恵器坏・甕・瓶類、土師器埦、窯壁などが出土した。									
13	田尻ジッタ遺跡	野々市市田尻町	○				○	○	2,325	市
	中世の竪穴状遺構及び２条の並走する溝を検出した。また、近世の墓域を検出した。									
14	末松遺跡	野々市市中林	○	○	○	○	○		1,260	市
	中世と古代の遺構面を確認した。中世では、土坑、掘立柱建物５棟を検出した。古代では、多数の土坑、掘立柱建物１棟と竪穴建物４棟検出した。									
15	横江古屋敷遺跡	白山市横江町		○					533	市
	弥生時代の土坑、溝を検出した。弥生土器が出土した。									
16	横江古屋敷遺跡	白山市横江町		○	○				522	市
	弥生時代の土坑、溝を検出した。弥生土器が出土した。									
17	横江Ａ遺跡	白山市横江町		○	○		○		349	市
	中世の掘立柱建物、井戸を検出した。中世陶磁器、土師器が出土した。									
18	北安田南出ヌノハシ遺跡	白山市北安田町				○			2,295	市
	古代の掘立柱建物、溝を検出した。土師器、須恵器が出土した。									
19	北安田南遺跡	白山市北安田町		○	○	○			1,294	市
	弥生時代の竪穴建物や土坑、古代の溝を検出した。弥生土器、土師器、須恵器が出土した。									

20	西任田遺跡	能美市西任田町		○	○	○	○		1,460	県
	弥生時代の平地式建物、弥生～古墳時代の溝、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物、平安時代～中世の水田、中世の川跡などを検出した。弥生時代の平地式建物からヒスイ製のまが玉が出土した。									
21	小松城跡	小松市丸内町						○	45	市
	本丸西側に位置する「土居」の石垣の一部を調査した。									
22	一針Ｃ遺跡	小松市一針町		○	○	○	○		4,400	県
	弥生時代～古墳時代では、周溝をもつ平地建物や掘立柱建物、土坑、溝など、中世では、二重の堀に囲まれた屋敷地に掘立柱建物や井戸・土坑などを検出した。銅製の三具足が出土した。									
23	古府シマ遺跡	小松市古府町				○	○		1,850	県
	平安時代末～中世の集落跡を確認した。区画溝に囲まれた敷地内部に多数の柱穴や井戸、竪穴状遺構などを検出した。古墳時代～室町時代の土器や陶磁器、行火、曲物、鈴、銅銭などが出土した。									
24	矢田野古墳群	小松市月津町			○				41	市
	矢田野３号墳の周溝の一部を調査した。									
25	薬師遺跡	小松市矢崎町			○	○	○		87	市
	古代の土器が出土した。									
26	上荒屋オジマヤマ遺跡	小松市上荒屋町				○	○		165	市
	８世紀後半～９世紀前葉の須恵器窯３基を調査した。									
27	弓波遺跡	加賀市弓波町		○	○	○	○		660	県
	弥生時代後期～古墳時代の方形土坑、７世紀代の掘立柱建物、中世の土坑などを検出した。									
28	庄・西島遺跡	加賀市庄町他		○	○	○	○		8,580	県
	弥生時代～古墳時代の川跡を検出し、初期須恵器などが出土した。古墳時代～奈良・平安時代の川跡群を検出し、多量の木製品が出土した。奈良・平安時代の掘立柱建物、土坑、小穴などを検出した。									
29	山代イチマイヨリ遺跡	加賀市山代温泉				○			720	県
	平安時代後期の掘立柱建物、井戸、土坑などを検出した。									
30	宝町遺跡	金沢市宝町						○	1,024	学
	眼科病棟跡を検出し、さらに城下町の遺構も調査した。溝・土坑・ピットなどから陶磁器、独楽、土人形、木製品などが出土した。									

調査担当　**県**：県埋文センター　**市・町**：市・町教育委員会等　学：金沢大学埋蔵文化財センター

◎学術研究、遺跡整備に伴う発掘調査

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積（㎡）	調査担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
A	旧松波城庭園	能登町松波					○		300	町
	枯山水遺構、礎石建物、石敷遺構、石列などを確認した。									
B	七尾城跡	七尾市古城町					○		57	市
	城下大手道（門の高～高屋敷）に３箇所のトレンチを設定した。調査地全体に削平及び盛土で大きく造成されている痕跡が確認でき、七尾城下の変遷を解明する上で新たな知見が得られた。									
C	柳田シャコデ廃寺跡	羽咋市柳田町他		○		○			220	市
	古代寺院の寺域の確認調査。東側の遮蔽施設と見られる柱穴列の延長部を確認し、寺域東部の把握が進んだ。									
D	金沢城跡（玉泉院丸北）	金沢市丸の内						○	15	城
	玉泉院丸庭園石垣の中心部である「色紙短冊積石垣」の基礎部分の確認調査を実施し、構築時期等に関する知見を得た。									
E	末松廃寺跡	野々市市末松				○	○		127	市
	中門推定範囲及び金堂北東隅の調査を行った。金堂北東隅では瓦が帯状に堆積し、７世紀後半に創建された金堂を取り囲むように堆積したものと考えられる。また８世紀代に再建された金堂に伴う石敷きを検出した。									
F	西山古墳群	能美市徳久町			○				80	市
	西山８号墳の移築された横穴式石室を現地で復元するため、奥壁や基底石の跡などを確認した。									

調査担当　**市・町**：市・町教育委員会等　**城**：県金沢城調査研究所

※本データは、発掘調査報告会資料から転載（一部改変）したものである。

田岸（たぎし）遺跡

所 在 地　七尾市中島町田岸地内　　調査期間　令和元年８月１日～令和２年２月14日
調査面積　2,340㎡　　調査担当　島田亮仁　西盛　凪

遺跡位置図（S＝1/25,000）

調査成果の要点

- 縄文時代中期中葉の集落を確認した。竪穴建物群は帯状に配置し、弧状に延びた集落様相を確認した。
- 竪穴建物６棟、竪穴状土坑５基以上を検出した。深さ約90cmの竪穴建物や石列が二重に巡る石囲炉を伴う竪穴建物も確認した。
- 石器は信州産とみられる黒曜石製石鏃や、糸魚川周辺に産する蛇紋岩系の磨製石斧が出土し、当時の交流が広範囲に及んでいたことが判明した。

遺跡は、のと鉄道西岸駅から北へ約1.5kmの七尾湾を望む海岸段丘上に立地する。現況は畑地であり、標高約16～19ｍを測る。発掘調査は一般国道249号改築事業に先立つもので、今年で２年目となる。昨年度調査は後世の削平を受け、遺構の遺存度は低く、東（海）側で縄文時代中期中葉の土坑、小穴をわずかに確認した。

今年度は、昨年度の北側、Ⅱ区～Ⅳ区を調査し、微地形は西（山）側から海（東）側に向かって緩やかに傾斜している。包含層と地山の一部は削平されており、表土直下で遺構を検出し、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、小穴、柱列を確認した。これらの建物群は帯状に配置され、弧状に延びる集落の様相を確認した。

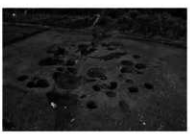
竪穴建物（ＳＩ）は、石囲炉を伴うもの４棟、焼土を伴うもの２棟を確認した。また、石囲炉や焼土を伴わない小規模な竪穴状土坑を５基以上確認した。

ＳＩ１の平面プランは楕円形を呈し、中央付近ではやや細長い長方形の石囲炉を伴う。石囲炉の底面は著しい被熱により焼土化している。ＳＩ４の石囲炉は、やや角張った川原石を直立に据え、コーナーに小さめの石を据えて全体の形を整えている。ＳＩ３の床面は検出面から約90cmの深さがあり、残りの良好な竪穴建物である。５基の柱穴を確認し、壁際には溝が巡る。床面には炉の痕跡とみられる焼土が確認された。多くの土器が出土しており、竹を半分に割ったような工具による半隆起線文を施した縄文時代中期中葉、上山田式土器の他に、石器や土偶も出土している。ＳＩ５は石囲炉を伴う竪穴建物で、７基の柱穴を確認し、東（海）側の２基の柱穴の間が出入口と推定される。建物のほぼ中央に石囲炉があり、石列が二重に巡り、内側の石は直立、外側の石は貼り付けたような珍しい構造となっている。廃棄時には小型の深鉢と、深鉢の口縁部を倒位に埋設している。

調査区からは、縄文土器、土錘、土偶、石器、須恵器、陶磁器が出土した。石器の中には信州産とみられる黒曜石製石鏃や糸魚川周辺に産する蛇紋岩系の磨製石斧が出土しており、当時の交流が広範囲に及んでいたことが判明した。（島田亮仁）

全景（北東から）

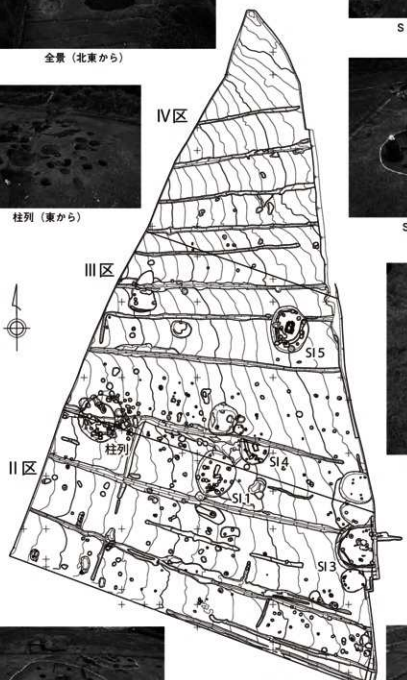
ＳＩ４の石囲炉（南から）



柱列（東から）

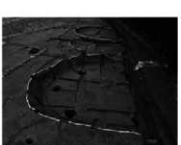
ＳＩ５全景（南東から）

ＳＩ５の石囲炉（南西から）



田岸遺跡全体図（S＝1/500）

ＳＩ１全景（南西から）



ＳＩ３全景（南西から）

酒井（さかい）バンドウマエ遺跡

所 在 地　羽咋市酒井町地内　　調査期間　令和元年５月13日～同年７月29日
調査面積　1,690㎡　　調査担当　館　直人　島田亮仁　西盛　凪

遺跡位置図（1/25,000）

遺跡遠景（北東から）

調査成果の要点

- ２面の調査を実施し、上層では中世の集落を確認し、土坑、溝、小穴、水田を検出した。
- 下層では、奈良・平安時代の集落を確認し、掘立柱建物、溝、土坑、小穴、河跡を検出した。

遺跡は、羽咋市北東部、碁石ヶ峰西麓の扇状地の先端に位置する。調査地の東側には永光寺川が流れ、西側は邑知潟にかけて水田地帯が広がっている。

調査は一般国道159号改築（羽咋道路）に伴うもので、平成27･29･30年度に引き続き実施した。昨年度調査８区の南側、９区で２面の調査を実施し、中世、奈良・平安時代の遺構を検出した。

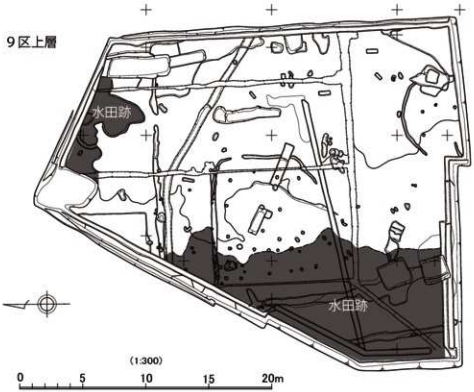
上層では、中世の集落跡と水田跡を確認し、溝、土坑、小穴など検出した。土坑、小穴は南側に分布したが、明確な掘立柱建物は確認出来なかった。また、水田は調査区西側付近で遺存状態が良好であり、南北方向に延びる畦畔を確認した。

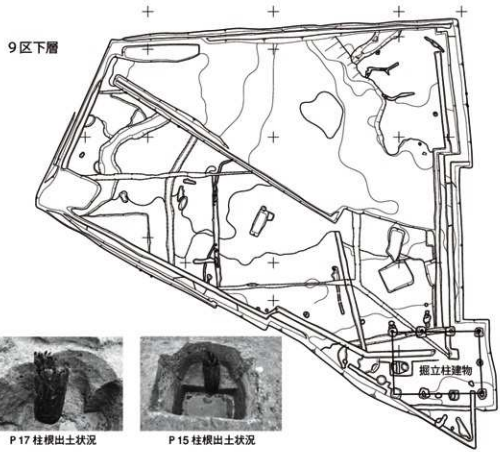
下層では、奈良・平安時代の集落跡を確認し、掘立柱建物１棟、溝、土坑、小穴、河跡を検出した。掘立柱建物は調査区の南西端で確認し、規模は２間×３間の側柱建物である。桁行は約6.9ｍで、柱間寸法は2.3ｍ、梁行は約5.0ｍで柱間寸法は約2.5ｍを測る。柱穴は平面隅丸方形を呈し、一辺約70～90㎝である。柱穴の４基には柱根が遺存しており、柱根の直径は約20㎝である。梁行の柱穴は、一辺が短いが柱根の直径は他のものとほとんど変わらない。４本の柱根は全体にやや西側に傾いており、東側から何らかの力が加わった可能性が考えられる。また、柱穴の中には柱を抜取った痕跡が確認できるものがあり、東西方向に抜き取られた可能性が指摘できる。なお、今回の調査では、後世の河による攪乱で、掘立柱建物が１棟しか確認されていないが、西側に更に居住域が広がる可能性があろう。

出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、石製品、木製品がある。　（島田亮仁）

掘立柱建物（北東から）

平安時代の土師器出土状況





P 17 柱根出土状況

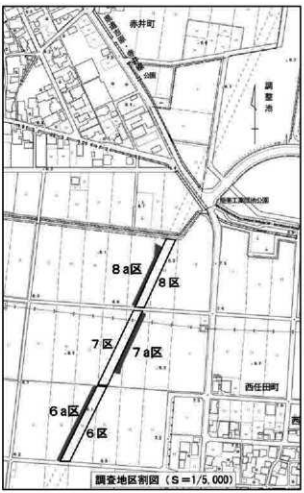
P 15 柱根出土状況

酒井バンドウマエ遺跡全体図（S＝1/300）

西任田遺跡（にしとうだ）

所 在 地　能美市西任田町地内　　調査期間　令和元年５月15日～同年12月17日
調査面積　1,460㎡　　調査担当　白田義彦、中家正之

遺跡位置図（S＝1/25,000）



調査地区割図（S＝1/5,000）

調査成果の要点

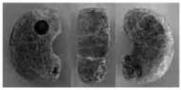
- 弥生時代後期の周溝を持つ平地建物を検出し、壁溝から翡翠の勾玉が出土した。
- 平安時代の水田を検出した。
- 平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物を検出した。

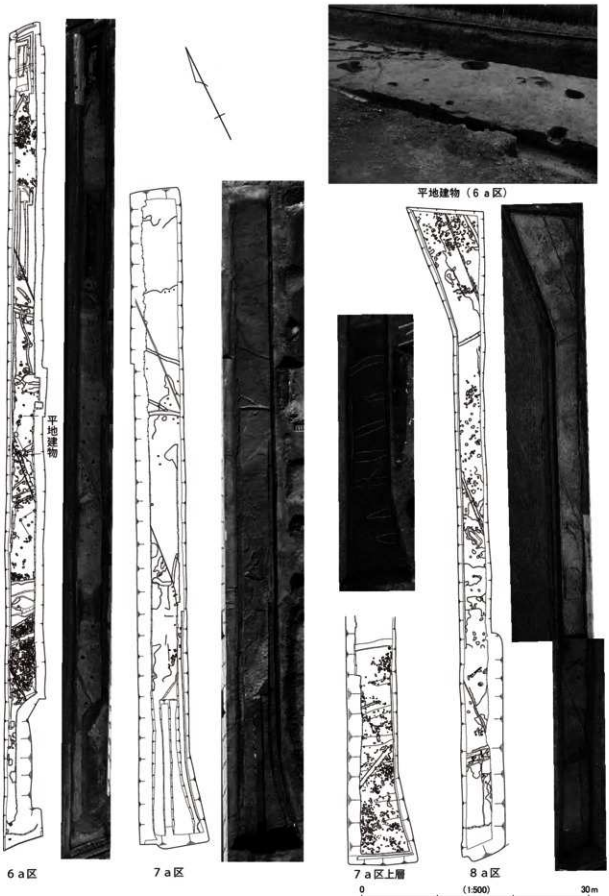
本遺跡は平成28年度に北陸新幹線建設に伴う調査が実施され、今回の調査は北陸新幹線建設に伴う取付道路工事によるもので、平成28年度調査６区～８区に隣接する箇所（６ａ～８ａ区）で実施した。

６ａ区では、前回調査で検出した平地建物の続きを確認し、新たに柱穴３基を検出し、五本柱の建物であることを確認した。３基全ての柱底には礎板が敷かれ、前回調査の２基の柱底にも礎板が敷かれていた。建物の周溝（外周溝と壁溝）は柱穴列の北側で検出し、内側の壁溝から翡翠の勾玉（長さ13.4㎜）が出土した。６ａ区南側では、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物を検出した。前回調査の掘立柱建物と一連のもので、建物が西側に広がるのを確認した。

７ａ区南側の上層では、平安時代の水田跡を検出し、約４ｍ間隔で配された畦畔状の高まりを確認した。高まりはほんの数㎝のもので、褐灰色砂層に覆われていたため、かろうじて検出でき、砂層下に薄い腐植土層があり、草地が一挙に洪水砂で埋もれた状況であった。

８ａ区では、８区から続く弥生時代後期～古墳時代前期の溝を検出し、流路が西へ屈曲するのを確認した。（白田義彦）

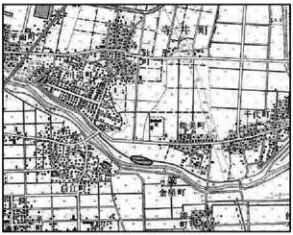

６ａ区出土翡翠勾玉



調査区全体図と遺構写真

一針（ひとつはり）C 遺跡

所 在 地　小松市一針町地内
調査期間　平成 31 年 4 月 10 日～令和元年 6 月 4 日、令和元年 10 月 16 日～令和 2 年 2 月 21 日
調査面積　4,400㎡　　調査担当　浜崎悟司　岩瀬由美　安中哲徳　水田　勝
山内花緒　加藤江莉　西山美那　中谷光里



遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

- 主に３つの遺構面を確認し、弥生時代～中世にかけての遺構・遺物が出土した。
- 上層では、中世の水田関連遺構や道路状遺構などを検出した。
- 中層では、中世の館跡などを検出し、井戸から銅製三具足が出土した。同一面で、古墳時代後期～平安時代の掘立柱建物なども検出した。
- 下層では、弥生時代中期～古墳時代前期の集落跡を検出した。

遺跡は、小松市北部を流れる梯川の中流域右岸に位置する、弥生時代から中世の集落遺跡である。平成 25 年度から、梯川河川改修事業に伴う発掘調査を実施している。

平成 25 ～ 27 年度には新堤防予定地を調査し、弥生時代～中世の集落跡を確認した。平成 29 年度は改修前堤防の川側を調査し、弥生時代中期の環濠、中世以降の旧梯川流路などを確認した。平成 30 年度は改修前の堤防地点を対象に調査を行った。遺構の遺存状態は良好で、調査区西端部では３つの遺構面を確認した。

令和元年度も、改修前の堤防地点の発掘調査を行った。遺構の遺存状態は良好であり、上・中・下３つの遺構面（一部に最下面）を確認した。以下、秋以降の調査成果を中心に紹介する。

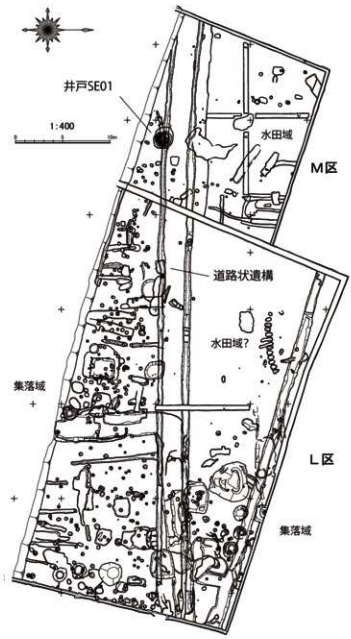
調査区遠景（北西から）

上層では、室町時代後半～戦国時代の遺構を検出した。柱穴、土坑、溝、水田関連遺構（畦状遺構・水路・杭列等）、道路状遺構を確認した。道路状遺構は道幅約３m、路面幅約２mであり、調査区を東西方向に横断していた。調査区の北側では、柱穴・土坑等は少なかった。主に水田などの生産域として用いられていたと考えられる。

中層では、鎌倉・室町時代の遺構群を検出した。二重の堀などから館跡と推定される。井戸からは、土師器や陶磁器、石臼や茶臼などの石製品、漆器椀や編カゴ状の製品が出土した。５基の井戸を調査したが、井戸枠などは存在しなかった。井戸枠などを抜き取り、周囲の土で埋めつつ、石や石製品などを廃棄したと推定される。

井戸 SE01 は上層で検出したが道路状遺構に切られており、使用時期は中層である。井戸の上層には五輪塔、行火、砥石、土師器皿、越前焼や加賀焼といった陶磁器が廃棄されており、中層からは銅製三具足、漆器椀・横槌などの木製品が出土した。この井戸は、室町時代に利用され、戦国時代に埋められたと考えられる。

三具足は香炉・花瓶・燭台を一組としたもので、ほぼ完形の状態で出土した。保存状態が良好なため、屋内で使用されていたと想定される。館内で一組の仏具として使用されたのち、館の廃絶等により廃棄されたとみられる。出土地の近くには方形の区画溝があり、仏堂などの宗教施設が存在した可能性が示唆される。



上層全体図

中層の同一面では、古墳時代後期～奈良・平安時代の掘立柱建物、土坑、溝、畠（畝溝）なども確認した。

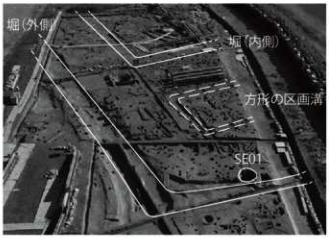
下層では、弥生時代中期～古墳時代前期の平地建物や掘立柱建物、柱穴、土坑（土坑墓を含む）、溝などを検出した。過去の調査では弥生時代中期の環濠も検出している。今回確認した平地建物は外周溝を３本持つため、同じ場所で続けて建て替えたことを示す。このような同一地点での建て替えは、これまでの調査でも確認している。土坑から碧玉製管玉の未成品が出土しており、集落内で玉づくりが行われていた可能性がある。

調査区北側の一部では、洪水等により埋まった地点があり、部分的にもう１面（最下面）を調査した。時期は弥生時代中期であり、下層の一部と同一の時期だと思われる。

発掘調査は継続中だが、６～９月の増水期は調査不可能な現状にある。遺構密度が高く、出土遺物も多量なため、今後の課題は多い。

（山内花緒）

上層の道路状遺構（東から）



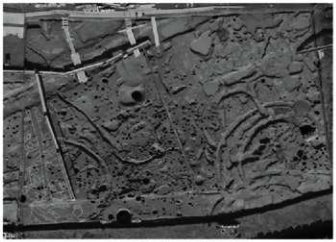
二重の堀を持つ館跡（中層）

茶臼の出土状況（中層の井戸 SE16）

井戸 SE01 上部（上層で検出）

SE01 出土の銅製三具足

中層全体図



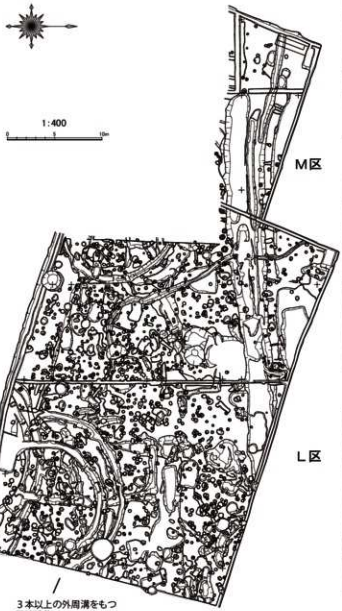
下層の完掘状況（上空から）

中層で出土した古代の土器

弥生時代中期の土器（令和元年度春の調査）

弥生時代の平地建物（北から）

碧玉製管玉未成品の出土状況



下層全体図

古府（こふ）シマ遺跡

所 在 地　小松市古府町地内
調査面積　1,850㎡

調査期間　令和元年５月21日～令和元年10月25日
調査担当　浜崎悟司　岩瀬由美　水田　勝　西山美那
　　中谷光里

遺跡位置図（1/25,000）

調査成果の要点

- 上面で鎌倉時代から室町時代の稠密な遺構を検出した。
- 4-2区で室町時代に埋没した堀状遺構を検出した。

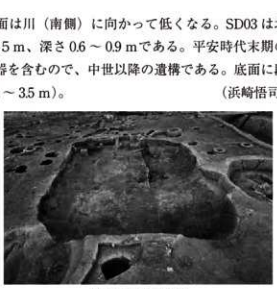
遺跡の発掘調査は梯川改修工事に係るもので、平成30年度から開始した。令和元年度は前年度調査の南東側を対象に、3-4・3-5区、4-2区の調査を実施した。調査区周辺は、通称「タチ」と呼ばれている。

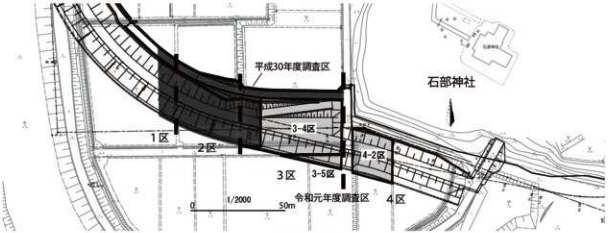
３区では、谷地形が存在すること、工事などの削平により遺構検出面の地質が異なっている。標高の高い順では、黄褐（～灰）色粘質土層（①層）、中央部では下層包含層（②層）、南西隅では黄褐色砂層（③層）である。北東部には①層があり、南西部には③層が存在する。②層の分布範囲では、上層遺構の調査終了後に下層包含層として、一部の掘削を実施した。②層内には、轆轤成形の土師器が主体であり、石材も多数散布していた。多量の土器類や石材に混じって、銅製の分銅（72.3ｇ）や鉄製の鈴が出土しており、下層遺構の性格を垣間見せているものとみられる。下層包含層の掘削と遺構検出作業は次年度以降の作業となる。

３区中央の北辺寄りで礎石を据えた大型の掘立柱建物を検出した。東西５間、南北１間以上で、３区を東西に隔てる南北溝を切込むことから、鎌倉時代以降の遺構である。多くの井戸が検出されたが、井戸側を遺すものについては掘削を次年度以降に持ち越した。３区からは大量の土器類が出土したが、上層遺構出土の土師器皿はほぼ全て手づくねと看取された。竪穴状遺構が多く、北東側では南北に列をなして検出された。

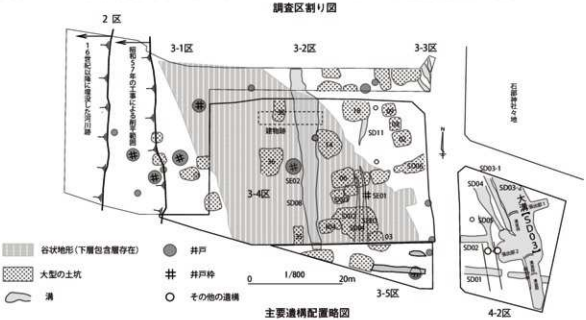
4-2区では、遺構検出面は①層のみであり、検出面は川（南側）に向かって低くなる。SD03は北北西－南南東方向に伸びる堀状遺構であり、幅２～５ｍ、深さ0.6～0.9ｍである。平安時代末期のSD01を切り込み、埋土には14世紀代の土器・陶磁器を含むので、中世以降の遺構である。底面に段を設け、川側に順次深くなっている（溝底レベル4.0～3.5ｍ）。（浜崎悟司）

SD08 全景（北から）


SK36 全景（南から）



調査区割り図



主要遺構配置略図

鉄製鈴

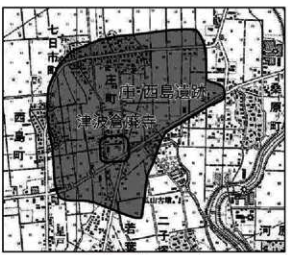
銅製分銅

SE02
縦板組の井戸枠
と曲物の水溜

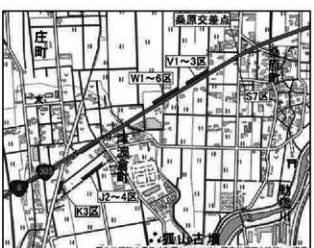
掘立柱建物の礎石検出状況

庄（しょう）・西島（にしじま）遺跡

所 在 地　加賀市桑原町・津波倉町地内他　　調査期間　平成31年4月9日～令和2年1月7日
調査面積　8,580㎡　　調査担当　立原秀明　金山哲哉　舘　直人　齊藤綾乃
奥座　普



遺跡位置図（S＝1/25,000）



調査区配置図

調査成果の要点

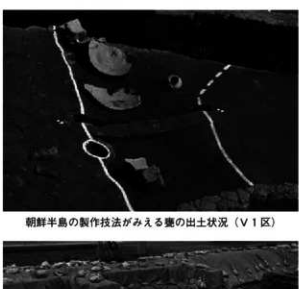
- W１～６区では、古代～中世の河跡で護岸跡を検出し、建築部材、曲物、斎串などが出土した。
- V１～３区では、小河川跡を挟んだ東西の微高地上で奈良・平安時代の掘立柱建物跡７棟ほか多数の柱穴を検出した。
- 河跡からは、朝鮮半島の技術で製作された可能性のある甕（古墳時代）や、古代の墨書土器が出土した。

遺跡は、江沼平野のほぼ中央に位置する古墳時代、奈良・平安時代～中世の集落遺跡である。遺跡の推定範囲は、東西約400ｍ、南北約500ｍと広大であり、この地域の中心的な集落の一つと考えられている。

本遺跡の発掘調査は、一般国道８号改築（加賀拡幅）工事を原因として平成27年度から着手しており、５年目となる今回の調査は、遺跡の南東側縁辺と推定される区域を対象に行った。調査の結果、調査地の最西端、国道南側の津波倉町地内に設定したＪ２～４区、Ｋ３区では古代の掘立柱建物２棟を検出したが、他は小穴主体の縁辺的な状況を確認するにとどまった。一方、同調査区から北に約400ｍの地点から東方向に設定した国道沿い北側の調査区（V･W区）では、西部の約110ｍの区間（W１～６区）で古墳時代～中世の川跡を、東部の区域（Ｖ１～３区、Ｓ７区）では、小河川を挟んだ東西の微高地上に古墳～奈良・平安時代の集落跡を確認した。古代～中世の河跡には杭や板を用いた護岸や堰が設けられており、堆積土からは大量の板材に混ざり、護岸材に転用されたとみられる建築部材、曲物、カゴとみられる編材片、水辺の祭祀を彷彿させる斎串や桃の種など、地下水により腐食を免れた多様な遺物が出土した。微高地上で確認した古墳時代の遺構は、溝や廃棄土坑にとどまったが、上述の小河川東岸で朝鮮半島の製作技法が窺われる古墳時代中期の甕が出土したほか、河跡及びその付近から数多くの出土遺物がみられた。上述の甕が出土した河跡の東岸付近では数は少ないものの拳大の椀型滓の出土があったほか、鉄鉗や袋状鉄斧といった鉄製品各１点も出土している。過年度調査

Ｖ３区遠景（北東から）

Ｗ６区河跡木製遺物出土状況



朝鮮半島の製作技法がみえる甕の出土状況（Ｖ１区）

Ｖ３区掘立柱建物（北から）

も含め鍛冶関連の遺構は付近では確認されていないが、これらの遺物の出土は、鍛冶関連施設が近接する可能性を示す資料として注目される。

また、同小河川の東側は本遺跡の南東縁辺と推定される区域であるが、平成29年度の調査では古代前半期の掘立柱建物複数棟と遺構が極めて高い密度で確認されている。その調査区と国道を挟んで南接するＳ７区でも同時期の掘立柱建物の柱穴を多数検出したほか、国道と併走する溝跡から大量の土師器・須恵器が出土するなど、今回の調査でも縁辺とは程遠い濃密な遺構・遺物分布状況を確認した。一方、小河川の西側の微高地に当たるＶ１～３区でも、奈良・平安時代の掘立柱建物を７棟以上確認した。最も大型の建物はＶ３区で検出した南北方向に軸を持つ３間×４間以上の側柱建物である。柱穴は一辺60cm前後を測る隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さ40cm前後を測る。柱根は遺っていなかったが、多くの柱穴で底面に柱の沈下による直径20cm前後の窪みが確認された。このように柱痕跡が遺る柱穴が少なからず確認されたが、現地調査の時点で復元に至った建物は限定的であった。

また今回の調査では、これまでみられなかった墨書土器が、上記の建物跡の近接域（河跡や遺物包含層）から５点出土している。文字が不鮮明なことから判読は今後の課題であるが、建物群の性格や本遺跡に関わった集団を理解する糸口となる可能性もあり、慎重に検討を進めたい。

Ｖ３区掘立柱建物や柱穴群は、西側へ向かってその密度を増している。同区西側には未調査区間を挟み、河跡エリアを確認したＷ区に接している。上述の遺構分布状況から、建物域はその東端に位置するＷ６区の河岸付近にまで広がるものと推察される。次年度以降も本遺跡の調査は継続する予定であり、当該区域の様相がさらに明らかになるものと期待される。

（金山哲哉）

【K区】

K3区北部

K3区南部

K3 区北部　全景（北東から）

K3 区南部　全景（北東から）

J2 区　掘立柱建物（南西から）

J3 区　掘立柱建物（北東から）

【J区】

J2区

J3区

J4区

【W区】

W1区

W2区

W3区

W4区

W5区

W6区

第 1 面

第 2 面

河跡

0　(1:800)　50m

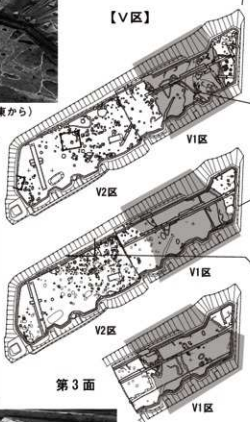
W4 区第 2 面　河跡 4 堰跡（東から）

W1 区第 1 面　河跡 3 木器出土状況（北から）

W6 区第 2 面　河跡 12 など（南から）

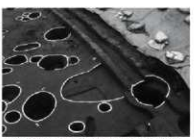
V1 区第 1 面　全景（北東から）

【V区】

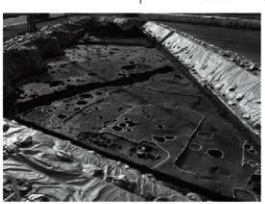


V1 区第 1 面　鉄鉗出土状況

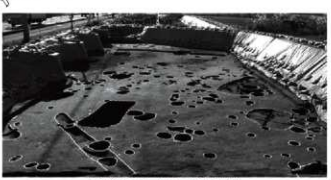
V1 区第 2 面　SK05（古墳時代中期）



V2 区第 2 面　掘立柱建物（東から）

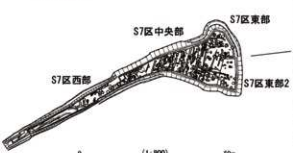


V3 区第 1 面　全景（北東から）



V2 区第 1 面　全景（北東から）

【S区】



S7 区中央部　全景（東から）

弓波（ゆみなみ）遺跡

所 在 地　加賀市弓波町地内　　調査期間　令和元年８月１日～同年11月19日
調査面積　660㎡　　調査担当　白田義彦、中家正之

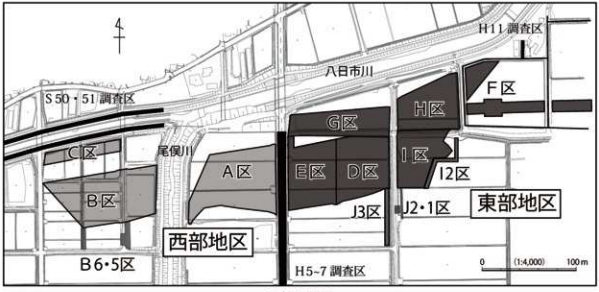
調査成果の要点

- 弥生時代から中世の集落跡を確認した。
- 弥生から古墳時代の方形土坑を検出した。
- 古墳時代末から平安時代の掘立柱建物を検出した。
- 中世の大型土坑を検出した。

遺跡は平成28年に北陸新幹線建設に伴う大規模調査が実施され、弥生～古墳時代の中核的集落と方形区画や古墳など、古墳時代末～中世の掘立柱建物と井戸などが確認されている。平成30年度から北陸新幹線建設関連の取付道路工事に伴う調査を実施しており、今回の調査区は幅約４ｍである。

Ｉ２区では主に掘立柱建物を検出し、建物の主軸方位は①北から西に45°前後振れるもの、②同20°弱振れるもの、③同10°前後振れる物もの、④同２°前後振れるものに分類できる。調査区幅が狭いため、掘立柱建物の一部を検出したに過ぎない。掘立柱建物の時期幅は概ね古墳時代末～平安時代と考えられるが、柱穴から出土した土器は少なく、時期の特定は今後の検討課題である。

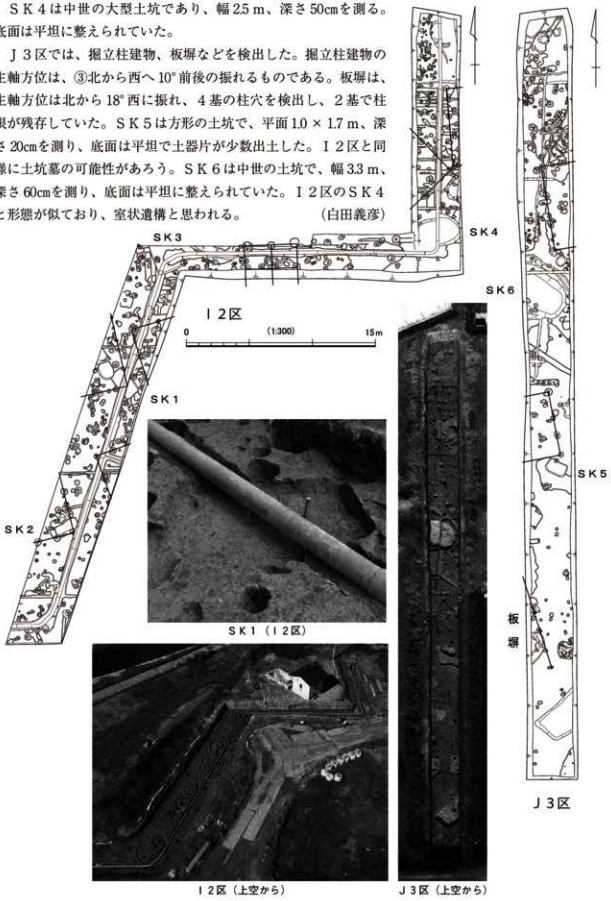
また、弥生～古墳時代と思われる方形土坑を３基検出し、出土遺物は少しの土器片のみであった。ＳＫ１は平面1.2×2.4ｍ、深さ20cmを測り、底面は平坦に整えられていた。ＳＫ２は平面1.9×2.4ｍ、深さ30cmを測り、東側は二段掘りで、底面は平坦に整えられていた。ＳＫ３の北側は破壊を受けており、幅は約2.7ｍ、深さ20cm、底面は平坦に整えられていた。これら土坑の形態は共通点が多く、土坑墓の可能性があろう。



調査区配置図

ＳＫ４は中世の大型土坑であり、幅2.5ｍ、深さ50cmを測る。底面は平坦に整えられていた。

Ｊ３区では、掘立柱建物、板塀などを検出した。掘立柱建物の主軸方位は、③北から西へ10°前後の振れるものである。板塀は、主軸方位は北から18°西に振れ、４基の柱穴を検出し、２基で柱根が残存していた。ＳＫ５は方形の土坑で、平面1.0×1.7ｍ、深さ20cmを測り、底面は平坦で土器片が少数出土した。Ｉ２区と同様に土坑墓の可能性があろう。ＳＫ６は中世の土坑で、幅3.3ｍ、深さ60cmを測り、底面は平坦に整えられていた。Ｉ２区のＳＫ４と形態が似ており、室状遺構と思われる。　（白田義彦）



調査区全体図と遺構写真

令和元年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

今年度下半期は、松梨遺跡（加賀市　平成29年度調査）と八日市遺跡（小松市　平成29度調査）の整理作業を行った。

松梨遺跡は弥生時代から近世の遺跡であり、金属器・木製品の実測・トレースを行った。金属器は煙管・かすがい・銅銭、木製品には井戸枠・杭・曲物があった。木製品の中でも曲物は直径50～60cm、高さ40～55cm程度のものが7点あり、保存状態も良好であった。実測は大変であったが、遺物の大きさと数を考えると保存処理と保管場所が今後の課題である。

八日市遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡であり、木製品、石器、土器の選別を行った。木製品は大量に出土しており、種類も農具、祭祀具、建築部材、容器等バラエティーに富んでいた。大型品も多く、特に祭祀関連の遺構と考えられるSK10・SX01の貯水施設の部材は加工痕も明瞭に残っており、非常に良好な状態であった。石器は砥石、碧玉などの剥片が多く、他に磨製石斧、打製石斧、石錘等を確認した。土器の選別作業は一部を実施した。（横山そのみ）

曲物の実測作業（松梨遺跡）

木製品の選別作業（八日市遺跡）

石製品の選別作業（八日市遺跡）

土器の選別作業（八日市遺跡）

県関係調査グループ

下半期は、金沢城跡（金沢市　平成30年度調査）、古宮遺跡（白山市　平成30年度調査）の整理作業を行った。

金沢城跡は、記名・分類・接合、実測・トレースを行った。今年度整理の瓦は、残存率がよく、元の大きさや形がわかるものが多かった。また、接合では洗濯バサミが挟まらない厚みのため、接着剤が固まるまで瓦の自重を利用して養生するしかなく、それらが複数集まるとまるで瓦のビルが聳え立っているような光景が広がった。4年にわたった金沢城跡（鼠多門）の整理作業では、当初は瓦の区別がつかず、破片を持ち歩き手あたり次第で接合を確認する程度であった。しかし、最終的には些細な色調の違いや胎土・焼成の差から、目当ての個体を追えるまでに成長することが出来た。

古宮遺跡は、記名・分類・接合作業を行った。遺物は土師器皿が殆どであり、テンバコ100箱ちかくに及ぶ。そのため、接合中の作業台は常に小さなタイルが一面に敷き詰められているような状態であった。普段であれば、形や色の情報を頼りに遺物を探すが、これだけ形も色も同一的なものが多いと、それぞれの個体の特徴がなかなか頭にインプットされず同一個体を探し出すのに苦労した。しかし、なんとか形にしなければという思いから、手がかりを作るべく、口縁・底部別や器高の高い・低い別に寄せてみたり、色ごとで集めてみたりと様々な工夫を凝らして接合作業を実施した。

（澤山　彬）

瓦の接合作業中（金沢城跡）

瓦の接合作業（金沢城跡）

瓦の実測作業（金沢城跡）

中世土師器皿の接合作業（古宮遺跡）

特定事業調査グループ

下半期は、漆町遺跡（小松市　平成27年度調査）、大菅波コショウズワリ遺跡（加賀市　平成28・29年度調査）の整理作業を行った。

漆町遺跡では、上半期に引き続き記名・分類・接合、出土品実測・トレース作業を行った。

湯だめや中甑の破片が小さく、形にするのは難しいと思ったが、湯だめはほぼ完形になるほどまで接合できたものもある。犂先と思われる鋳型も確認した。今年も五十川伸矢氏の指導を仰ぎ、鋳造関係遺物の理解が深まった。多量に出土した陶磁器類・石製品・鋳造関係遺物の記名・分類・接合作業を終えることができた。

大菅波コショウズワリ遺跡では、木製品・金属器の実測・トレース作業を行った。

木製品では、漆器椀を柄杓に転用したもの、結桶、柱根などを実測したが、脆弱な柱根は取り扱いに苦労した。（土生久美子）

中甑接合状況（漆町遺跡）

犂先鋳型接合状況（漆町遺跡）

五十川氏による出土品整理指導（漆町遺跡）

木製品実測作業（大菅波コショウズワリ遺跡）

日本中近世の資源消費にかかる社会構造変化と技術変化

山田昌久（首都大学東京）

はじめに

「古代社会からの変貌とその担い手たちの消費拡大」。石川県は羽咋市寺家遺跡や穴水町西川島遺跡などの湿地遺跡の発掘によって、日本の古代～中世社会（地方社会）の形成の様子を発信してきた。

12 世紀は一言でいえば、律令制による国家体制や、10 ～ 11 世紀に国司に大幅な行政権を移行させて、そこから租税進納させる体制にいたる、中央貴族社会から地方貴族社会への拡大した貴族のための制度が組み替えられた時代である。さらに、郡司・郷司層が墾田して開発領主が誕生するなど、やがて権門から独立する新たな階層が登場した。やがて、武士の登場、そして地方社会の形成、さらには都市住民層の形成などが続いた。

福岡県の博多遺跡群の調査、大分県大友氏関係遺跡群の調査、広島県草戸千軒町遺跡の調査、大阪府堺遺跡群の調査など、中世の交易・商業集団の実態を伺わせる遺跡調査成果。大坂の市街地形成や江戸の市街地形成など、16 世紀以降の都市住民層の登場を示す遺跡群の調査。それらが進むと、資源消費の構造変化や技術変化の論点が浮かび上がった。

このような資源消費にかかる社会構造変化は、経済活動の変化や技術変化と連動していたことについての話題提供である。

1．漆の技術

西川島遺跡の調査以降、四柳嘉章はこの時期以降の漆器研究に邁進し、多くの成果を発表した。12 世紀からの漆器の技術には、平野材であるケヤキを素材とし精巧な塗装技術を有する古代の漆器とは異なる、トチノキやブナなどの山地材を使用した炭粉渋下地の簡易塗装の漆器群が存在した（スライド 3）。それは、日本各地に木地師集団が分散して漆器生産が始まり、新しい階層に拡大した漆器利用への対応した技術変化が確認された。

縄文時代から古代の遺跡からは、漆の木に間隔をあけて傷を回し付けた遺物が確認（スライド 4）されていて、9 ～ 10 世紀までの漆生産が類似した技術基盤で行われていたことが分かる。しかし中世期の技術を判断する遺物は無く、18 世紀の遺跡からは、現在の漆採取法に近い、溝切り段数を重ねて溝内に浸潤した漆液を掻きとる方式を見せる遺物が発見されている。

つまり、中世前期の木地の生産方式生産量の変化に対応したであろう、漆生産の技術変化を示す資料は現時点では無いのである。ただ、中世後半以降における漆液の増量を示す資料や遺物は確認できる。16 世紀から 17 世紀、日本は漆の輸入国であった。つまり漆使用者層の拡大、とりわけ漆都市生活者層の拡大に対して図られたのは、南蛮貿易・中国貿易による使用漆液の確保（スライド 6・7）であった。その漆液には、ハゼノキの樹液も含まれていたと考えられる（このことは日本列島西南部での古い時代の漆器の樹液の議論にも発展するが）。18 世紀の各大名の領地経済対策によって、漆の木の植栽が奨励されたことは、上杉鷹山を描いた藤沢周平の『漆の実のみのる国』他で、多くの人々に知れ渡っている。つまり、江戸後期に増産した漆の木を、現在の技術で掻きとって漆生産は変化（スライド 4）したと考えられる。

2．製材技術

打ち割り製材から縦挽き製材への移行を示す遺物は、各地の16世紀の遺跡から認められる。打ち割り製材は、節（幹の内部に残るかつての枝の痕跡）があると実行しにくいため、1ｍ以下の太さの木では有効材確保の生産性が低い。そこで、弥生時代以降、1.5～2ｍを越える木を得ての製材が実行されていた。

それに対して、鋸引きで製材することになると、節も挽き切ることができるので、縦挽き製材であれば、50～60cmほどの太さの木でも角材・板材を生産できる（スライド12・13）。つまり、植林して3世代程度の時間をかけるだけの森を、資源地をすることができるのである。このことも、急速に拡大した都市生活者のための建築用材調達に、大きく貢献する技術変化であった。比重の小さいスギ・ヒノキなどの針葉樹は、さらに移送にも適しており、江戸・大阪への回送経済構想（スライド14・15）が図られた。

3．燃料材の確保

「おじいさんは山に柴刈りに……」。柴を刈ることは石斧では困難である。なぜならば、細い枝は撓って、石の刃先が切り進むことを妨げるからである。すると、里山から6～7年生の柴材を調達して自家消費に充てることは、鉈や柴刈り鎌の登場以降に行われた、ということになる。大きな荷重をかける柴刈り鎌は、茎を作り出してから生まれたと考えられるから、弥生時代・古墳時代の折り曲げ式固定の鎌の段階では、まだ作ることができない。また、刃幅を長くした鉈も、固定部に大きな荷重がかかるので、古代後半以降に普及する。里山経済下の村人の燃料は、太い木を割ってつくった薪であったと考えられる。

また、近世に入って柴刈りが可能になって以降も、都市住民層の燃料材は柴材の回送は「かさ」が大きく効率的でないため、薪材が多用された。上位階層者は炭の使用が可能であっても、庶民層の燃料材は薪で、江戸では個別住宅での薪使用量まで対応できないため、外食も発達して燃料消費を抑えた。

4．農具の変化

弥生時代の農耕技術について、不耕起であったことを提示して以降、農耕技術についての再検討を行なってきた。U字型の鉄製刃先を付けた古墳時代の鍬鋤の切削痕は明瞭に水田床土に残っているのに、弥生時代の水田床土にはその痕跡が見られないこと、鍬の裏に蟻溝などの技術で頑丈に付けられた「泥除け」は耕起の邪魔になっていたが、U字型刃先を付けるようになると消失し、掘削の障害は取り払われる。国家的な徴税を計画するには、生産量の拡大を行なわないでいては、生産者は疲弊する。畜力耕作もふくめ、古墳時代後期にはアジア社会に伍する国家を目指した大和政権は、経済政策無しで徴税することは、結果的には生産破綻を起こすことを理解していた。

近世の風呂鍬に似たU字型鉄刃先の導入は、鍬の側縁部を使用して土を動かす作業にも効果を発揮した。

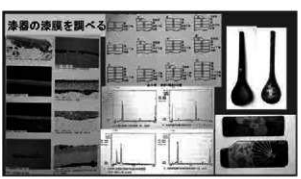
やがてU字刃先は、16世紀には鍬の両側縁のすべてを鉄で覆う、風呂鍬へと変化した。鍬扱いは切削以外の操作が効率よくできるようになった。この土木技法の変化は、耕作地を様々な地勢にまで広げた。

スライド１

スライド５

スライド２

スライド６

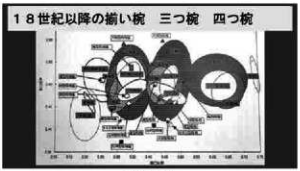


スライド３

スライド７

スライド４

スライド８



スライド９

スライド１０

スライド１１

スライド１２

スライド１３

スライド１４

スライド１５

古代能登の挽物について

久田正弘

1．はじめに

古代能登の挽物の概要を報告するが、図の番号・参考文献などは『石川県埋蔵文化財情報第41号』（久田2019）を参照されたい。

2．能登国挽物の事例

能登国は、718年（養老2年）越前国から羽咋（はくい）・能登（のと）・鳳至（ふげし）・珠洲（すず）郡を分割されて成立したが、741年（天平13年）に越中国に併合され、757年（天平宝字元年）に再び分国した。旧羽咋郡内では4遺跡（1～4）10点（ケヤキ6：ケヤキ？3：スギ1、盤6：椀3：皿1）を確認した。旧能登郡内では9遺跡（5～13）47点（ケヤキ14：ケヤキ？15：スギ17：不明1、盤43：椀4、黒漆塗4）を確認した。旧鳳至郡内では2遺跡（14・15）3点（ケヤキ3、黒漆塗盤3）を確認した。旧珠洲郡内では2遺跡（16・17）7点（ケヤキ？3：スギ2：スギ？1：不明1、盤6：皿1）を確認した。

3．遺跡の性格

17遺跡の性格（複数の事例あり）は、郷の関連施設8遺跡、神社・寺院関係3遺跡（3・4・7）、工房3遺跡（3・13・16）、祭祀関係1遺跡（9）が確認された。国衙・郡衙・郷や神社などで工房を持っていた可能性がある。樹種でみると、能登国出土67点中ケヤキ23点：ケヤキ？21点：不明2点：スギ？1点：スギ20点が確認された。その結果、ケヤキ系65.7％：スギ系34.3％である。寺家遺跡と下笠師E遺跡の樹種は全てケヤキであり、他の遺跡はケヤキもあるがスギが多いので、旧能登国の挽物は上位の遺跡ではケヤキが主体、下位の遺跡ではケヤキもあるがスギも多いことが伺えた。

4．製作工程について

新潟県糸魚川市大所地区での工程段階（重要有形文化財）は、カタウチ、ナカキリ、アラビキ、ナカビキ、シアゲと呼ばれ、その呼び名に合わせると、古代ではカタウチ・ナカキリ、ナカビキかシアゲも確認される。ナカキリは古代・中世・昭和・現代でも刃幅以外はあまり差がみられない。69はカタウチの可能性が高く、スギの挽物は能登では中世初頭まで存在した可能性が想定される。

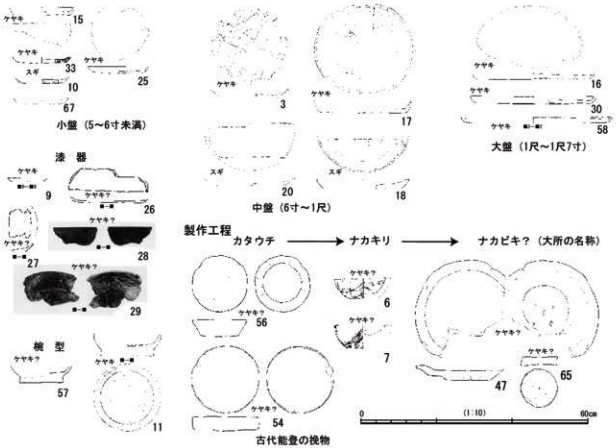
5．まとめにかえて

古代の木盤・漆盤のサイズは『延喜式』『観心寺勘録縁起資財帳』から、小盤、中盤、大盤に分かれ、小盤（5寸148mm～6寸177.6mm未満）：ケヤキ5点、スギ？2点、直径10・14・16cmのサイズが確認される。中盤（6寸以上～1尺2960mm未満）：ケヤキ、スギも一定量あり、直径20～22cm程度（7～7.5寸）、24～25cm程度（8～8.5寸）、28～29cm（9.5寸）程度が確認される。大盤（1尺以上1尺7寸503.2mm程度）3点は全てケヤキである。

能登の古代挽物では、大盤はケヤキのみであり、スギは公的に下位の遺跡に多い傾向が伺えた。

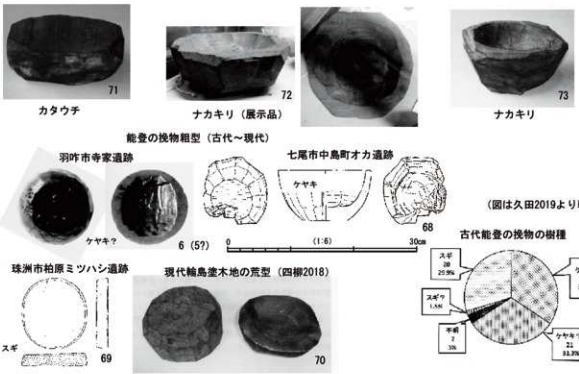
参考文献

久田正弘　2019「古代能登の挽物について」『石川県埋蔵文化財情報第41号』（公財）石川県埋蔵文化財センター



遺跡名と報告番号（久田2019を参照）
1 宝達志水町二口かみあれた遺跡(1), 2 羽咋市吉崎・次場遺跡(2), 3 寺家遺跡(3～9), 4 志賀町福井ナカミチ遺跡(10), 5 羽咋市四柳白山下遺跡(11～15), 6 羽咋市四柳ミッコ遺跡(16～25), 7 七尾市能登国分寺跡(26・27), 8 小池川原地区遺跡(28・29), 9 小島西遺跡(30～34), 10 吉田C遺跡(35), 11 杉森テラフト遺跡(36), 12 三引遺跡(37～46), 13 下笠師E遺跡(47～57), 14 輪島市釜屋谷B遺跡(58), 15 輪島市時国古屋敷遺跡(59・60), 16 能登町真脇遺跡(61～66), 17 珠洲市南方遺跡(67)

糸魚川大所地区木地屋民俗資料館の荒型（図録・展示品）



古代北加賀における挽物容器の集成

熊谷葉月

はじめに

今回の研究集会テーマは「古代・中世の木製容器」である。その中で本報告は、木製容器のうち挽物を取り上げた。地域を北加賀地域（旧加賀郡と旧石川郡、現在のかほく市南部から白山市北部）、時期を7～10世紀を対象として集成を試みた。報告書から該当する資料を抽出する作業を金山哲哉（当センター調査部）と共同で行った。報告書の観察表記載を基本として、報告本文、図版から読み取れることを一部加えて一覧表を作成し、当日資料に掲載した。計測表の項目、器種などの相違点や矛盾点が解消されないままの掲載となっているが、現段階での状況と傾向をみて、今後の課題について挙げる機会としたい。

先行研究について

北陸の出土木製容器について弥生～中世までを網羅した、川畑誠1996「北陸地方の木製食器の概要」『第39回埋蔵文化財集会　古代の木製食器』がある。また、能登地方については、その後増加した資料を加えてまとめ、樹種の観点も加えた、久田正弘2019「古代能登の挽物について」『石川県埋蔵文化財情報第41号』に示されている。川畑氏が8世紀～10世紀前半の状況について、「盤、杯、椀、皿は土製（金属製）食器と共通する形態が大部分を占め、挽物盤が主体をなす。この盤は当初より数法量が存在し、その法量より共用器的性格を持つと推定される」「地域差を反映した細部の形態差をもつ」としている。今回の集計でも盤の数が突出している。また「9世紀中葉以降、法量より個人食器的性格の強い恣器系の器種（皿、椀）が加わる」とされており、9～10世紀の皿、有台皿、有台椀についてそのような雰囲気が見られる。

全般的見て、資料数は増加しているが、川畑氏が示された状況に大きな変化はないものと考えられる。

集計結果から見えること

集計の結果、以下の20遺跡143点を抽出した。該当遺跡は次の通りである。うち、分析により樹種同定されているもの、あるいは肉眼観察による針葉樹、広葉樹の記載のあるものが○数字の11遺跡82点であった。

①指江遺跡・指江B遺跡（かほく市）②加茂遺跡・加茂廃寺跡（津幡町）③北中条遺跡（津幡町）
4千木ヤシキダ遺跡　5磯部カンダ遺跡　6戸水C遺跡　⑦大友E遺跡　⑧大友西遺跡
9戸水大西遺跡　⑩無量寺C遺跡　⑪畝田B遺跡　⑫畝田・寺中遺跡　⑬畝田ナベタ遺跡
14金石本町遺跡　⑮藤江B遺跡　16二ツ寺遺跡　17三小牛ハバ遺跡　⑱中屋サワ遺跡
19上荒屋遺跡　20横江庄遺跡（白山市）（※4～19（金沢市））

これらを遺跡ごと器種別、器種と樹種別、遺跡と樹種別のそれぞれについて点数を集計した。この結果から見られる傾向について以下に記載する。

1　器種について

盤・皿類が大半を占める（143 点中 97 点）。指江遺跡・指江 B 遺跡の 26 点、上荒屋遺跡の 25 点が突出している。次いで漆器椀（24 点）である。畝田・寺中遺跡（12 点）が目立っている。

2　使用材について

ケヤキがとくに多く（82 点中 48 点）、次いでトチノキ（12 点）、スギ（8 点）と続く。

3　遺跡の分布および性格について

とくに金沢市北西部日本海沿岸地域に集中する状況が見られた。発掘調査が多く行われている地域であり、沖積低地で河川跡が多いため木製遺物が残りやすい環境であることが大きいが、公的施設に関連する性格の遺跡が多いことも要因の一つであろう。港湾関連（金石本町、畝田・寺中遺跡、戸水 C 遺跡）、荘園関連（藤江 B 遺跡、上荒屋遺跡、横江庄遺跡）、官衙関連（加茂遺跡、北中条遺跡）、寺院（三小牛ハバ遺跡）等の公的性格の強い遺跡からの出土が多い。

今後の課題

時期ごと、大きさ、形状の変化の傾向の抽出が必要となると考えられる。研究集会での報告時にも記載漏れ、誤記載等の訂正、表現の違いの統一化が必要なことも認識しており、掲載資料に中世に属するものも含まれているのではないかという指摘もあった。また荒型など未製品の存在についても確認が必要ではという意見があった。本稿でも十分な見直しができないままであり、南加賀の資料を含めて集成、検討していく中で改善していきたい。

①遺跡・器種別　集計

	①	②	③	4	5	6	⑦	⑧	9	⑩	⑪	⑫	⑬	14	⑮	16	17	⑱	19	20	
	指江	加茂	北中条	千水T	磯部B	戸水C	大友E	大友西	戸水大	無量C	畝田B	畝・寺	畝田T	金石本	藤江B	二ツ寺	三小牛	中屋キ	上荒屋	横江庄	計
皿・盤類	26	12	7			1	7	1	2		1	9		3	1	1		1	25		97
漆皿・盤類				1				1	3				1						1	1	8
杯・椀類		2			2					1							1				6
漆椀類		2					1	1	1			12					1		5	1	24
鉢							1														1
漆器鉢	1																				1
漆器高杯脚									1												1
漆器小壺																		1			1
蓋？																			1		1
不明		3																			3
計	27	19	7	1	2	1	9	3	7	1	1	21	1	3	1	1	2	2	32	2	143

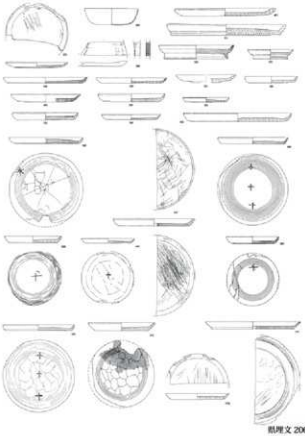
②樹種・器種別　集計

	ケヤキ	スギ	トチノキ	キハダ	ヒノキ材	ツバキ属	針葉樹	広葉樹	計
皿・盤類	34	7	3	1	1		4	5	55
漆皿・盤類	1								1
杯・椀類	4								4
漆器椀	7	1	7						15
鉢								2	2
漆鉢	1								1
漆器高杯脚									0
漆器小壺						1			1
蓋?									0
不明	1		2						3
計	48	8	12	1	1	1	4	7	82

③遺跡・樹種別　集計

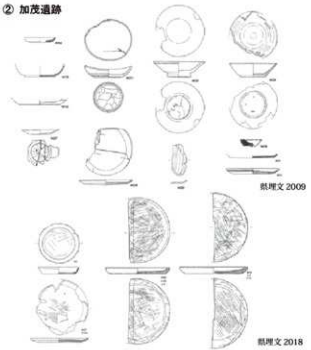
	①	②	③	⑦	⑧	⑨	⑪	⑫	⑬	⑮	⑱	
	指江	加茂	北中条	大友E	大友西	無量C	畝田B	畝・寺	畝田T	藤江B	中屋キ	計
ケヤキ	21	11			2	1		11	1	1		48
スギ	3	3						2				8
トチノキ	3	2		1	1			5				12
キハダ								1				1
ヒノキ材							1					1
ツバキ属											1	1
針葉樹			2					1			1	4
広葉樹				7								7
計	27	16	2	8	3	1	1	20	1	1	2	82

① 指江遺跡・指江B遺跡



能理文 2002

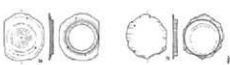
② 加茂遺跡



能理文 2009

能理文 2018

② 加茂・加茂廃寺遺跡

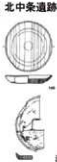


津幡町 2009

④ 千木ヤシキダ遺跡

金沢市 1991

③ 北中条遺跡A区



津幡町 2002

③ 北中条遺跡E区

津幡町 2004

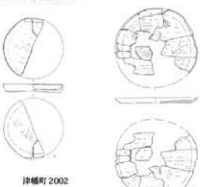
⑤ 磯部カンダ遺跡

金沢市 1999

⑥ 戸水C遺跡

能理文 2003

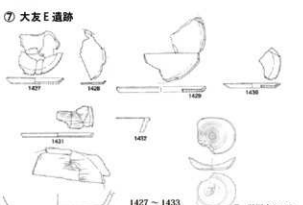
③ 北中条遺跡B区



津幡町 2002

0 (1:12) 40cm

⑦ 大友E遺跡



1427～1433
金沢市 2016

能理文 2016

⑧ 大友西遺跡

金沢市2002

⑨ 戸水大西遺跡

金沢市2000

金沢市2001

⑩ 無量寺C遺跡

県理文2004

⑪ 畝田B遺跡

県理文2017

⑬ 畝田ナベタ遺跡

県理文2005

⑭ 金石本町遺跡

金沢市1996

県理文1997

⑮ 藤江B遺跡

県理文2001

⑰ 三小牛ハバ遺跡

金沢市1994

⑯ ニッ寺遺跡

県理文2016

⑱ 中屋サワ遺跡

金沢市2010

⑫ 畝田・寺中遺跡

金沢市2014

県理文2005

県理文2006

⑲ 上荒屋遺跡

金沢市2000

⑳ 横江庄遺跡

松任市1996

0 (1:2) 40cm

当日の記録と資料検討会について

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流を図るものである。本研究集会は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から「環日本海文化交流史調査研究事業」の一環として実施しており、令和元年度で第20回目の開催となる。

今回の研究集会は、日本海沿岸各地域から出土した古代～中世の木製容器に焦点を当て、出土する遺跡の性格やその流通を把握するとともに、本県の特質を明らかにすることを目的とするものである。第18回目の開催となった平成29年度より、調査研究の深化・充実を目的に、1年目を「基礎研究」、2年目をその成果を踏まえた「研究集会」とする形態で行っている当研究集会であるが、今年度はその1年目の「基礎研究」として、首都大学東京の山田昌久特任教授を招き、「日本中近世の資源消費にかかる社会構造変化と技術変化」を題にご講演いただき、講演後の質疑・応答では、2年目の「研究集会」を念頭に、基本的な研究視点・課題等を確認した。

1　主　催　　公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

2　会　場　　石川県埋蔵文化財センター研修室

3　参加者　　当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者。1日目60名。2日目30名。

4　内容及び日程

テーマ　「古代・中世の木製容器」

日　時

1日目：講演・報告　令和2年2月26日（水）午後1時～午後4時30分

・講演

「日本中近世の資源消費にかかる社会構造変化と技術変化」

山田昌久（首都大学東京特任教授）

・報告

「古代能登の挽物について」　久田正弘

「古代北加賀における挽物容器の集成」　熊谷葉月

2日目：資料検討会　令和2年2月27日（木）午前9時～午前11時30分

小松市八日市地方遺跡出土木製品を中心に、資料検討会を行った。使途不明品が少なくない本遺跡資料であったが、山田教授により、器種の特定はもとより、資料を理解する上での観察視点等、数多くの有益な助言をいただいた。

山田講師

会場の様子

久田講師

熊谷講師

資料検討会の様子 1

資料検討会の様子 2

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載 （石川県埋蔵文化財情報）
第 1 回	2001.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第 2 回	2002.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第 8 号
第 3 回	2003.2.21	玉をめぐる交流	第 10 号
第 4 回	2004.10.24	縄文後晩期の低湿地集落 ー生業の視点で考える	第 11 号
第 5 回	2005.10.29	古代日本海域の港と交流	第 13 号
第 6 回	2006.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通 ー壺・壺・擂鉢を中心にー	第 15 号
第 7 回	2007.10.27	縄文時代の装身具 ー漆製品・石製品を中心にー	第 17 号
第 8 回	2008.10.26	日本海域における古代の祭祀 ー木製祭祀具を中心としてー	第 19 号
第 9 回	2009.10.24	弥生時代の家と村	第 21 号
第 10 回	2010.10.23	日本海域の土器製塩 ーその系譜と伝播を探るー	第 23 号
第 11 回	2011.10.29	近世日本海域の陶磁器流通 ー肥前磁器から探るー	第 25 号
第 12 回	2012.10.28	中世日本海域の墓標 ーその出現と展開ー	第 27 号
第 13 回	2012.10.26	弥生時代の墓	第 29 号
第 14 回	2013.10.25	舟と水上交通	第 31 号
第 15 回	2014.10.24	江戸時代の墓	第 33 号
第 16 回	2015.10.23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第 35 号
第 17 回	2017.2.24	環日本海文化交流史研究の展望	第 37 号
第 18 回	2018.2.23	近世成立期の土器・陶磁器様相 ーカワラケを中心にー	第 39 号
第 19 回	2019.2.23	北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相 ー城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心にー	第 41 号
第 20 回	2020.2.26	古代・中世の木製容器	本号（第 43 号）

漆町遺跡（金屋地区）における鋳物生産の把握に向けた視点と方法

西田昌弘（県文化財課）・川畑　誠

1．はじめに

平成27年度に発掘調査を実施した小松市金屋町所在の漆町遺跡（金屋地区）では、16世紀から17世紀前半の陶磁器とともに、大量の鋳造関連遺物が出土し、鉄鍋を中心とした鋳物生産の様相が具体的に明らかとなった。その概略は『石川県埋蔵文化財情報』第35号で報告しており、現在も膨大な量の出土品整理を進めているところである。以下では、これまでの鋳造関連遺物という特異な出土品の整理方法や、溶解炉構造などに関して得られた所見を整理・提示し、各方面からのご指導、ご意見を頂くことで、かつて「金屋」で営まれた鋳物生産に関する報告書作成に向けた一助としたい。　（川畑　誠）

2．漆町遺跡の概要

漆町遺跡は、石川県小松市の北部を流れる梯川左岸に位置し、標高3ｍ程の微高地上に立地する弥生時代から近世の複合遺跡である。昭和50年代には土地改良事業などに伴って広く発掘調査が行なわれており、蛇行する旧梯川を縫うように点在した集落が確認されている。その後、梯川改修築堤工事に伴い平成26・27年度に発掘調査がなされることとなり、遺跡の北東端部にあたる金屋町地内において調査が実施された（第1図）。調査区は平成26年度調査の1・2区と平成27年度調査の3・4区からなる。この内、3区の1,210㎡の範囲において上下2面の遺構面が確認できた。下位の第2面では、古墳時代前期の平地建物から15世紀代の屋敷地に伴うものと推測される区画溝などを検出

1 漆町遺跡　2　白江梯川遺跡　3　佐々木遺跡　4　佐々木ノテウラ遺跡
5　佐々木アサバタケ遺跡　8　一針C遺跡　13　幸町遺跡
14　本折城跡（16世紀中葉～　）　15　小松城跡（16世紀中葉～　）
16　大川遺跡（17世紀前半以降の近世小松城下町）

第1図　漆町遺跡の位置と調査区割図

している。第２面から包含層を挟んで検出された上位の第１面では、16 世紀から 17 世紀前半の陶磁器とともに鉄鍋中心とした鋳物生産に係る遺構・遺物群が検出された（第２図）。

遺物の大半は、地形が比較的低い廃滓場からの出土である。鋳型には完形に近いものもみられ、口径 21 ～ 45cm、高さ８～ 15cm の三足と吊耳をもつ鉄鍋が主に生産されていた（第３図）。また、鋳型が複数個まとまって廃棄（第４図）されていたことや湯だめの容積などから、１回の鋳造が数個単位で行われていたと考えている。このほか、溶解炉の中甑（第５図）や湯だめ（第６図）、鞴の羽口、三叉状土製品、銑鉄など鉄鍋の鋳造に関わる遺物が多数出土している。

こうした鉄鍋生産の工房として想定されるのが、微高地上に建つ、最大で 9.5 × 8 m を測る掘立柱建物である（第７図）。柱穴には、建物への荷重処置のための礎石が確認できたことから、踏み鞴を利用した操業が想起できる。また、建物の南側では、廃滓場へと続く土手状の高まりを確認しており、作業道として繰り返し低地の廃滓場へ不要物を廃棄していたものと考えられる。旧河川に近い低地の１区では、地山の粘土を採掘していたとみられる土坑群も検出されており、河川に隣接した地で一つの工房を中心とした鋳型製作から鋳造に至る一連の作業を担った空間構造が推測できる。

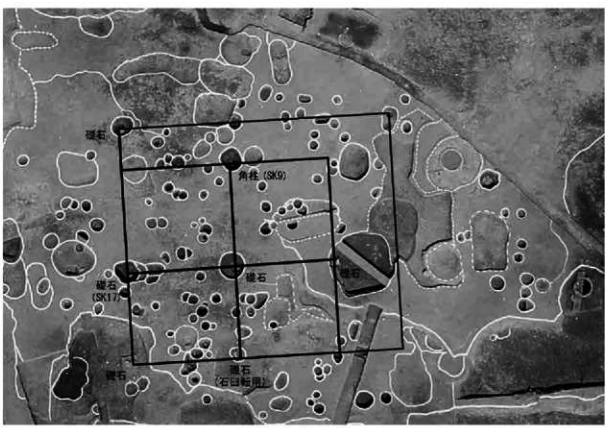
第２図　３区第１面遺構図（S＝1/400）

第３図　鋳型９・10 出土状況（南西から）

第４図　鋳型２～６・11 出土状況（北から）

第５図　炉３（中膜）検出作業（東から）

第６図　炉２（湯だめ）出土状況（北から）



第７図　掘立柱建物

第８図　掘立柱建物 礎石検出状況（SK17）

第９図　掘立柱建物 柱根（角柱）検出状況（SK9）

3．漆町遺跡における出土品整理方法

出土した遺物量は約 800 箱に及ぶ。出土量･作業量ともに膨大なため、五十川伸矢氏の指導のもと、年間計画を立案し、各地区・各層群別に以下の手順で整理作業を進めている。

①一次洗浄：極少量の水で溶解炉や鋳型に付着した土や汚れを除去する。また、土塊は水でふやかしながら手で崩し、滓や鋳造関連遺物の小片を取り出す。

②粗分類：②－１　廃滓層の調査にあたって設定した小グリッド（１ｍメッシュ）別に分類。
②－２　小グリッドごとに各層別に分類。
②－３　各層ごとに掘削深度別（５ないし 10cm 単位）に分類。
以上のように、現場での掘削単位に分け、各まとまりでの時期や組成の傾向等の検討ができるように分類を実施。

③詳細分類（一次）：粗分類したまとまりごとに、以下のような器種別・部位別に分類。

・鋳型
→ 器種別（鉄鍋外型、粗型、耳型、犂先、茶釜、鉄瓶、鉄瓶注口（外型・芯子）、鏡、梵鐘、梵鐘の乳、ジョウ、器種不明）
→ 部位別（上部（口縁部）、中部（体部）、下部（底部）、部位不明）

・炉壁
→ 器種別（中瓶、結合部、湯だめ、炉壁の滓（かす）、つらら状、羽口栓、注口栓）
→ 部位別（上部、中部、下部、羽口孔、部位不明）

・滓（磁石につく・つかない（磁石は Tajima PUP-M を使用））
→ 磁石につく → 鍛冶滓
→ 炉壁滓（含鉄）
→ 磁石につかない：土壌が錆と共にくっついたような土塊は「滓（かす）」に分類

・羽　口：径別に詳細分類
・屏　風：小型炉を含む
・坩堝、取鍋：緑青の付着の有無で再分類
・土製品：三叉状土製品（鋳造道具）、ブロック状土製品（鋳造道具か）、栓（鋳造道具か）、器種不明
・鉄製品：銑鉄、鍋（破片）、鍬、十能、板状鉄片、器種不明

また、木炭については、大型や外皮近くのもの、径が推測できるものは個別に梱包し、今後、樹種同定や C14 年代測定を実施予定である。

④記　名：鋳造関連遺物については直接記名せず、ラベルに記名の上、箱ないし袋詰め。

⑤詳細分類（二次）・接合：既分類の各器種内で接合を確認。合わせて器種・部位を再度確認。

⑥実測遺物・分析遺物の選別

⑦重量計測：記名ラベル単位で重量を図り、各層群別かつ詳細分類別の総重量表を作成。

⑧収　納：小グリッド・層群・掘削深度のまとまりで収納。

⑨実測・トレース作業

鋳型や炉壁の器種・部位については、詳細分類（一次）が終了した時点で、ようやく全体的な傾向がつかめたこともあり、詳細分類（二次）の際に、器種・部位の修正を行うことで、分類基準の統一化を図った。また、炉壁の部位については、完形に近い溶解炉内面の付着物やガラス質化の差異を参考に部位別の選別を行っている。鋳型や土製品では、器種認定に至らなかった遺物も多く、それらに

ついては形態別に類型化し、なるべく典型的なものを実測することで、今後の鋳造関連遺物の認識につながるようカタログ的な報告書となることを目的に、実測遺物の選別を実施した。

第 10 図　鋳型（鉄鍋の耳型）

第 11 図　鋳型（挈先か）

第 12 図　屏風または小型炉か

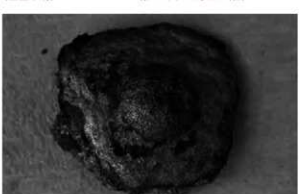
第 13 図　ジョウ

第 14 図　三叉状土製品

第 15 図　土製品（器種不明）

第 16 図　土製品（栓）

第 17 図　銑鉄（左：5.1kg、右：2.3kg）



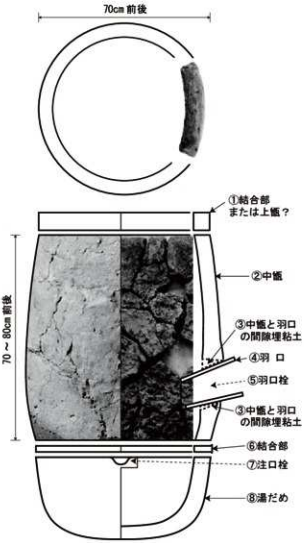
第 18 図　鉄鍋底の湯口跡か

4．整理からうかがえた鋳造関連遺物の復元

溶解炉の構造

倉吉市の民俗例の復元（倉吉市教育委員会1986）や大阪市の出土遺物より復元推定された模式図（小田木 2019b）を参考に作成した、漆町遺跡における溶解炉の復元案が第19図である。

民俗例や大阪市模式図では燃料の投入口となる「上こしき（上段）」、温度を上げるための送風口が挿入される「こしき（中段）」、溶けた地金を受けて出湯するための「湯だめ（下段）」からなる三段構造であるが、漆町遺跡では、詳細分類（二次）を全点終えた現段階で、明確に上こしきと認定できるものが確認されていないため、円筒形の炉1段と丸底の炉の二段構造と推定している。その名称については分類当初に三段構造を想定していたこと、鉄鋳物製上こしきの存在も否定しえないことから、出土品整理が現在進行形の現段階では、前者を「中甑」、後者を「湯だめ」と呼称したまま分類・記述を進めることとし、名称の修正については他の器種を含め今後の課題としたい。



第19図　溶解炉の復元案

溶解炉（中甑）

中甑は、井戸枠として転用された状態で出土した炉3（第5・20図）のほか、破片の状態から全周はしないものの上端から下端まで接合したものが数個体確認できており、それらから推測できた法量は、外径70cm前後、高さ70～80cm、炉壁の厚さは5cm前後を測る。形態は胴部下半がやや膨らむ円筒形を呈し、胎土には遺跡周辺で採取したと想定される川砂（粗砂～細砂）が混じるほか、植物を短く裁断したものを混ぜ込んでいた痕跡も確認できる。外面には10～15cm幅の輪積み痕跡がみられ、縦位ないし右斜め上方への整形・調整工具痕跡が認められる。一方、内面では、部位によって特徴的な様相が認められる。上半部でガラス質化が比較的弱く、白色付着物が特徴的に認められる一方、下半部では燃焼時に高温となったことでガラス質化した状態が顕著に認められ、下方に向かって垂れる様子もみられた。また、羽口挿入孔周辺では色調がやや異なり、厚みも3cm前後と薄く、若干外面側へ反った形状を呈するなど、炉内部での様相の差異が把握できている。このほか、羽口挿入孔の中には、挿入口を円盤状の粘土（「羽口栓」と呼称）で塞いだ後、溶解作業が行われていた痕跡を接合資料として確認できたもの（第22図）がある。炉3でも、最終的な羽口挿入孔から時計回りに50cmの箇所で、径13cmの羽口栓が確認でき（第21図）、羽口挿入孔を数度、移設しながら、中甑を繰り返し利用していたことがうかがえた。

上面

0 (S=1/12) 50cm

右側面・内面見通し

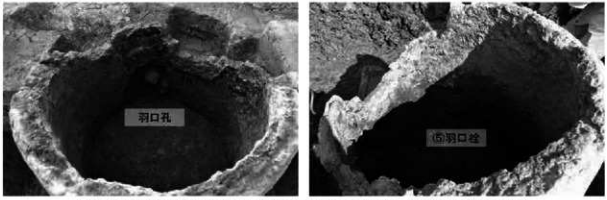
正面・内面見通し

(羽口孔)

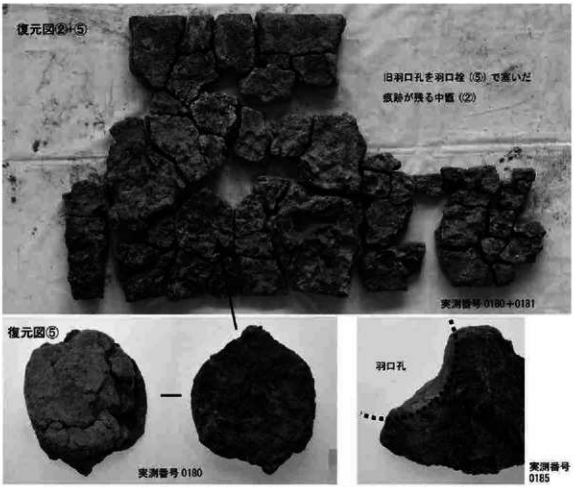
正面

右側面・外面

第 20 図　炉 3（中軸）の三次元モデル（S=1/12）



第 21 図　炉 3（中軸）の羽口挿入痕跡（左：最終的な羽口挿入孔、右：塞がれた羽口挿入孔）



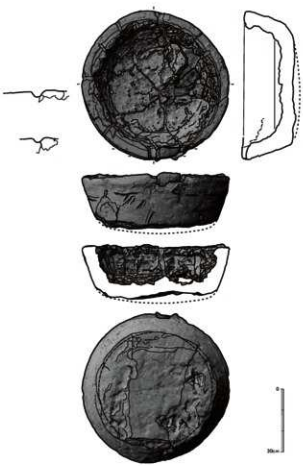
第 22 図　羽口孔を塞いだ痕跡が残る中甑（実測番号 0180・0181）と中甑の羽口孔（実測番号 0185）

溶解炉（湯だめ）

湯だめは、ほぼ完形の炉２で最大径約 70cm、残存高 26cm、炉内の深さ 20cm、炉壁の厚さ５cm 前後を測る（第 23 図）。これまでに確認できた湯だめは、いずれも丸底の形態を呈する。胎土は中甑と同様で川砂と推測される粗砂～細砂と混ぜ込まれた植物痕跡が認められる。上面には、片口状の出湯口（「注口部」と呼称）をもち、その形状は下半に丸みを持つ半円状の断面を呈する。炉２の注口部は外面側で幅３cm、内面側で幅５cm、上端面からの深さは３cm を測る。湯だめの内面は、中甑内面とは異なり、ガラス質化した発泡痕が目立つ。炉２では、注口部側で比較的滑らかな器面を呈する反面、対面から側面にかけての上端部にはノロ状のガラス質化した湯の張り出しが認められる。外面底部は後世に削られ一部破損しているため、掛け木の痕跡を明確にとらえることはできなかったものの、丸底で半円形の浅い出湯口をもつ湯だめ形状は、14 ～ 16 世紀に比定される大阪市山之内遺跡や大阪市苅田４丁目所在遺跡の「最下段」の炉（「湯だめ」に相当）と類似性をもち（大阪市文化財協会 2008）、今後、詳細な比較検討が必要といえる。

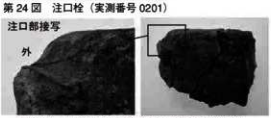
溶解炉を組む上で部品となる土製品

湯だめの注口部を塞いでいた土製品が「注口栓」（第 19 図－⑦. 第 24 図）である。同様の土製品は「栓状土製品」として大阪市内出土資料の集成と変遷が提示されている（小田木 2019b）。漆町遺跡出土の注口栓の形状は、山之内遺跡や苅田４丁目所在遺跡と類似し、湯だめの注口部形状に合わせて、突起部の断面形は半円状を呈する。

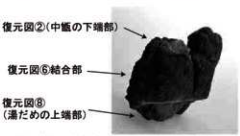


第 23 図　炉 2（湯だめ）（三次元モデルより作図）（S=1/18）

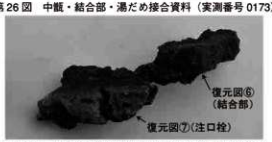
第 24 図　注口栓（実測番号 0201）



第 25 図　湯だめの注口部接写（実測番号 0186）



第 26 図　中甑・結合部・湯だめ接合資料（実測番号 0173）



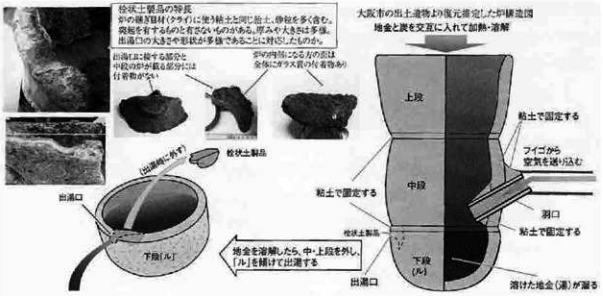
第 27 図　注口栓・結合部の接合資料（実測番号 0204）

また、中甑と湯だめの間には「結合部」（第 19 図－⑥）とした、中甑と湯だめを繋ぐ緩衝材的な粘土（倉吉市の民俗例では「ねなわ」と呼称される部分）がかみ、中甑下端部・結合部・湯だめ上端部が接合した状態の破片資料（第 26 図）も出土している。さらに、結合部と注口部を塞いでいたと推測される「注口栓」の接合資料（第 27 図）も確認していることから、溶解にあたっては中甑・結合部・注口栓・湯だめが組まれた構造であったことを、考古資料として確認できた。

想定される地金の出湯方法

漆町遺跡と類似した湯だめ形状をもつ大阪市の出土例では、中甑を取り外し、注口栓を外した上で、湯だめを傾け溶解した地金を流し出す、という方法が伊藤幸司氏や小田木富慈美氏によって提唱されている（伊藤 1994、小田木 2018・2019b）。

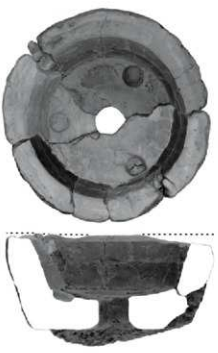
漆町遺跡でも湯だめの形態や特徴、注口栓の組成などの共通点から、同様の出湯方法が用いられていたものと考えている。中甑の外し方や湯だめの傾倒方法など今後解明すべき点は残るが、中甑下面や湯だめ上面に残る細砂を多く含んだ粘質土が薄く何度も貼り付けられた痕跡や結合部の組成は、溶解作業の終盤で中甑を外す上での造作や補修を示すものであり、注口栓の組成や湯だめ内面の特徴、上端部に残るノロ状の湯の張り出しは、湯だめのみとなった状態で、注口栓を取り除き、湯だめを傾倒して溶けた地金を出湯していた証左と考えている。



第 28 図　大阪市の出土遺物より復元推定された鞴炉の模式図（小田木 2019b）

鋳　型

出土した鋳型の器種には、三足をもつ鉄鍋外型、片口をもつ鉄鍋外型、鉄鍋の耳型、粗型、犂先、鏡、梵鐘、梵鐘の乳のほか、茶釜外型、鉄瓶外型、鉄瓶注口部の外型と芯子と推測される鋳型が挙げられる。このうち、漆町遺跡における鋳物生産の主体をなす鍋 B（五十川 1992）の形態をとる鉄鍋の鋳型についてみると、胎土には、粗型部では、粗砂～細砂の川砂と植物痕跡が認められる一方、真土部では細砂のみが混じり粒子は細かく均質となる。また、表面に黒味が残るものも多い。法量がわかる鉄鍋鋳型の内、最も小型のものは口径 25cm、底径 16cm、内面の深さ 8.5cm を測る（鋳型 15）。一方、最も大型の鉄鍋鋳型は口径 45cm、底径 35cm、内面の深さ 15cm を測る（鋳型 10. 第 29 図）。また、鋳型 10 の各部位の計測値は、脚部径 5cm 前後、脚部深さ 1 ～ 2.5cm、湯口径 8cm を測る。鋳型からは鉄生産のみでなく、銅製品の器種も存在することや、小型炉で緑青が目立つものもみられることから、銅製品の生産も合わせて行われていたことがうかがえる。



第 29 図　鋳型 10 の三次元モデル（S=1/10）

5．実測表現の新たな試み　－三次元モデルによる提示－

漆町遺跡では、完形に近い遺物が多いことから、破片資料に比べ、鋳造製品の形状や製作技術に関する情報量が圧倒的に多く、遺跡の歴史的位置づけや鋳物師がもつ技術などを知る上で極めて重要性が高い、との認識が調査当初よりあった。しかし、土器と異なり鋳型はかなり脆く、溶解炉は大型で重量も重いため、現地調査時に分割して取り上げた遺物を完形状態まで再度組む際に、どうしても破損や損傷が伴うことが予想された。仮に一個体に復元できたとしても、自重で新たな破損が生じてしまう恐れもあるほか、完形に復元した場合、断面観察ができなくなってしまうなどの懸念もあった。

また、時間とともに表面の劣化が想定されることから、現状での記録保存が必要と考え、今以上の破損を避けつつ、良好な状態で記録保存を行い、かつ完形に近い状態であるからこそ得られる情報量を最大限に提示できる図化・提示方法として、フルサイズのデジタルカメラによる撮影データを基に「三次元モデルの作成」を試みることとなった。これにより、その時点での形状や色調等の記録保存ができるとともに、分割片を損傷させることなくコンピューター上で接合させ、完形資料を分割して取り上げた接合後の遺物の特性に合わせた状態や向きを考慮した図化・断面作成が可能となった。

先に提示した第29図の鋳型10が九つの分割片を組み上げた三次元モデルであり、第23図の炉2（湯だめ）が三次元モデルから作成した二次元提示用の実測図である。従来の主観的かつ実測者の観察結果を表現した実測線以外に、株式会社ラングのPEAKITの特性を活かした特徴線の表現法による客観的な凹凸情報も図示することで、実測者が見逃した情報も読み取れるように意図した。また、二次元の提示のみではなく、三次元で作成したデータをフルに活用できるよう、報告書掲載にあたっては、ＱＲコードやＵＲＬの添付による三次元モデルの公開も検討しており、これまでの実測方法では表現・提示しきれない情報を視覚的に提示できる有効な手段になるものと考えている。

以上のように、二次元による実測と三次元による表現を選択的に用いることで、立体である実物に近い情報を、第三者が詳細に観察・計測でき、遺物・遺構といった実物から歴史を見る考古学の本質により近い状態で共有し、議論できる報告書の在り方を今後も模索していきたい。

6．まとめ

漆町遺跡において、何故、鉄鍋生産を中心とした鋳物の操業が営まれたのか？　その背景には、鉄鍋の利用が普及し始めて以降、室町時代に至り日常品としての需要が特に高まってきたことが考えられ、加賀地域を商圏に見据えた、水運の利便性や近辺で良質な粘土が採れる「地の利」を活かした、小規模ながらも継続的な鉄鍋生産が行なわれていたものと考えている。鉄鍋生産に係る工房など「金屋」の鋳物職人の存在を、この金屋町で確認できたことは、戦国から江戸期の加賀地域における鋳物生産と鉄鍋の商品流通のあり方を解明する上で、大きな成果であったといえる。

漆町遺跡出土の鋳造関連遺物は、膨大な出土量と状態の良好さから、多くの情報を引き出すことができる資料である。今後も出土品の詳細な観察を進めるとともに、他府県資料との比較を通して、技術的な特徴や系譜を明らかにしていくとともに、漆町遺跡がもつ情報の一端ではあるが、現段階の成果を報告することで、より広く情報や意見をいただき、類似資料の掘り起こしに繋げることで、この金屋町でかつて行われていた鋳物生産の歴史像を解明する一助となることを希求する。　（西田昌弘）

引用・参考文献

石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　2018 『小松市漆町遺跡－金屋地区Ⅰ－』

伊藤幸司　1994 「造炉の使用方法について－大手町３丁目出土鋳造炉を例に」『大坂城跡の発掘調査４」 大阪文化財センター　p.56

五十川伸矢　1992 「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集　国立歴史民俗博物館 pp.1-79

五十川伸矢　2005 「古代・中世の鋳造技術－鋳造土坑から復元される鋳造技術」『日本中世における鋼鉄の金属生産とその流通に関する研究　中間報告』

大阪市文化財協会　2008 『苅田４丁目所在遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

大阪府教育委員会・(財) 大阪府文化財センター　1995 『日置荘遺跡』

大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター　1997 『真福寺遺跡』
大阪府教育委員会　2002 『余部遺跡－中世河内鋳物師の工房群及び屋敷地の調査－』
大阪文化財センター　1993 『大坂城跡の発掘調査３』
小田木富慈美・伊藤幸司　2007 「21年目に解けた！謎」『葦火』130号　大阪市文化財協会　pp.4-5
小田木富慈美　2018 「溶解炉の注口と栓－大阪市出土の中世後半～近世初頭の鋳造関連遺物より－」『鋳造遺跡研究資料2018』鋳造遺跡研究会　pp.22-37
小田木富慈美　2019a 「石川県小松市漆町遺跡出土鋳造関連資料見学会参加記」『鋳造遺跡研究資料2019』鋳造遺跡研究会　pp.60-61
小田木富慈美　2019b 「大阪市内の遺構・遺物からみた河内鋳物師とその系譜」『シンポジウム河内鋳物師の実像に迫る』大阪市立大学　pp.37-58
倉吉市教育委員会　1986 『倉吉の鋳物師』
財団法人和歌山県文化財センター　2005 『徳蔵地区遺跡』
財団法人和歌山県文化財センター　2006 『高田土居城跡・徳蔵地区遺跡・大塚遺跡』
富山市教育委員会　2006 『富山市金屋南遺跡　発掘調査報告書Ⅲ』
西田昌弘、2016 「漆町遺跡」『石川県埋蔵文化財情報第35号』公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　pp.9-10

北陸地方の九州型石錘と山陰系甑形土器について

久田正弘

1．はじめに

石川県では平成に入り、九州型石錘と山陰系甑形土器の出土が報告がされてきた。筆者は、2019年度日本考古学協会駒沢大会の福岡県立糸島高校による九州型石錘のポスターセクションで神野晋作氏と少し会話をし、九州型石錘の認識を新たにした。また、山陰系甑形土器にも新知見が増えたので本稿をまとめることにした。

2．九州型石錘などの事例

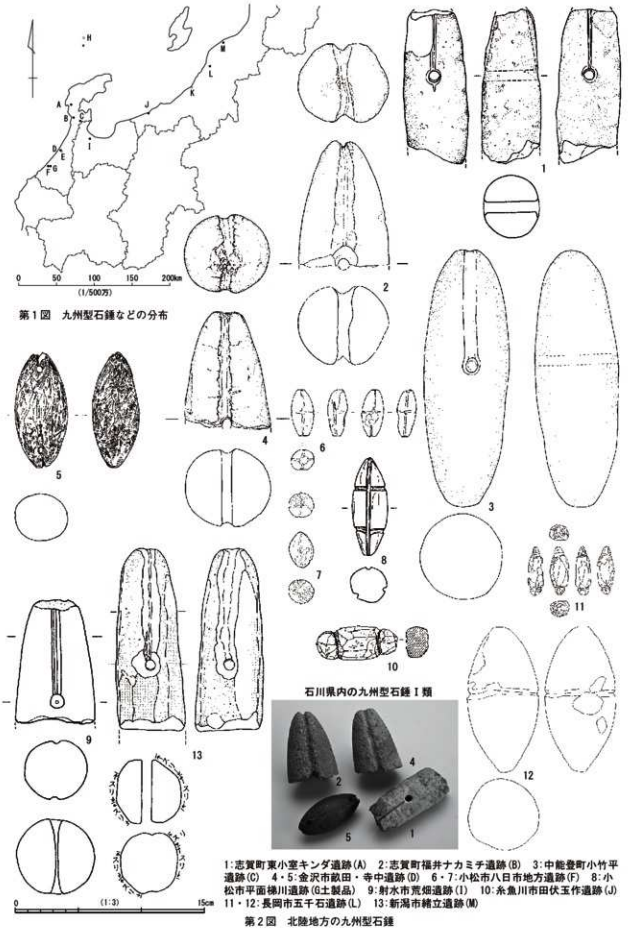
第２図１は、志賀町東小室キンダ遺跡（第１図Ａ）包含層出土である（本田ほか1998）。能登半島西岸で数少ない平野部に立地する。先端と下半を欠くが分銅形で下側に長く、孔の下側にも短い溝がある。軟質の灰白～淡黄色の凝灰岩質である。２は、志賀町ナカミチ遺跡（Ｂ）は旧福野潟の湖畔に立地する遺跡である（川畑ほか2017）。孔より下半を欠いており、分銅形と思われ、淡灰色の凝灰岩である。３は、中能登町小竹平遺跡（Ｃ）出土である（山本1985）。遺跡は邑知地溝帯の石動山系の裾に位置し、現在富山県氷見地方に抜けるルートの１つ、その登り口付近に位置する。３は分銅形で下半が長くて丸いものであり、深さ５㎜の溝と直径10㎜の孔を持つ。砂岩質で、1.1kgと思われる。蛸壺と思われる土器が２点報告されている。

４・５は金沢市畝田・寺中遺跡（Ｄ）出土であり、海岸部から内陸に立地する中核的集落で、古墳時代前期である（安ほか2006a）。４は下半が無いが分銅形と思われ、先端には敲打痕がある。細粒安山岩（黒色粒子多い）である。５は滑石製で搬入が指摘されている。紡錘形で上下端に直径５㎜の孔があり、孔から先端には長軸方向の細い溝を持つ。下側の先端には、溝に直行する傷のような切り込みがあり、両端とも少し欠けている。６・７は小松市八日市地方遺跡（Ｆ）出土である。６は埋積浅谷出土（八日市地方７～８期）である（下濱氏教示）。紡錘形の砂岩製で長軸４本、短軸１本の溝を持つ。７は12区包含層出土（下濱ほか2016）の土錘であり、紡錘形で長軸５本の溝を持つ。８は、小松市平面梯川遺跡（Ｇ）第３次包含層出土の土錘である（川畑ほか1989）。遺跡は梯川に接し、時期は弥生時代後期前半～後半と思われる。紡錘型で長軸に３本の溝、短軸に２本の溝を持つ。９は富山県射水市荒畑遺跡（Ｉ）出土で、南北朝のSD02から出土した溶結凝灰岩製という（久々1992）。上端と下半を欠損するが分銅形と思われる。10は糸魚川市田伏玉作遺跡（Ｊ）出土で、古墳時代の玉作遺跡である。滑石製で上下に短軸の溝を持つので、滑石製模造品ちきりの未成品とされたが躊躇された（関1972）。11・12は長岡市五千石遺跡（Ｌ）３区下層出土である（加藤ほか2011）。11の側面などは細かな研磨が入り、上・下には横溝を持ち、玉作遺跡なのでちきりの未成品と想定された。12は紡錘形の中央に幅４～７㎜で深さ１㎜の溝を持ち、玉作関係工具か石錘の可能性が指摘された。13は新潟市緒立遺跡（Ｍ）Ｃ地区包含層出土で安山岩という。上下を欠くが分銅形と思われる。他に溝を持つ石錘１点（黒埼町1998）があるが、これは古代の可能性もある。

3．九州型石錘の分類

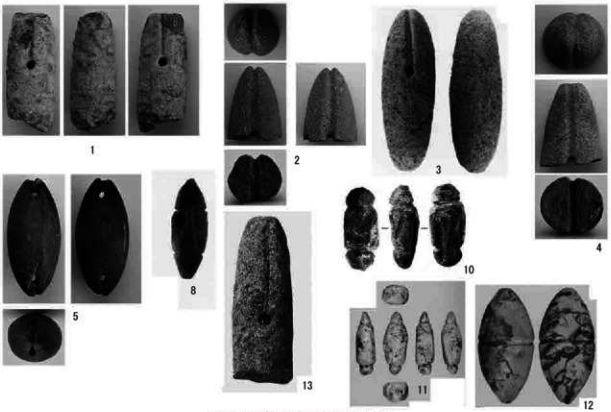
第４図は九州型石錘の分類であり、遺跡間での形態のバリエーションや重量に幅を持ち、分類が出来ないものがあり、Ⅱ類は形態・溝・穿孔・位置など多岐にわたるという（林田・中尾2014）。

第１図　九州型石鏃などの分布



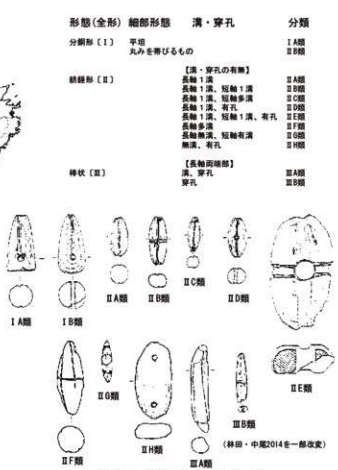
1:志賀町東小室キンダ遺跡(A)　2:志賀町福井ナカミチ遺跡(B)　3:中能登町小竹平遺跡(C)　4・5:金沢市畝田・寺中遺跡(D)　6・7:小松市八日市地方遺跡(F)　8:小松市平面横川遺跡(G土製品)　9:射水市荒畑遺跡(I)　10:糸魚川市田伏玉作遺跡(J)　11・12:長岡市五千石遺跡(L)　13:新潟市緒立遺跡(M)

第２図　北陸地方の九州型石鏃



第３図　北陸地方の九州型石錘（写真）

第４図　九州型石錘出土遺跡分布図



第５図　九州型石錘分類案（S=1/5）

1・8・12は分銅形Ⅰ類、3は下端が丸いⅠB類であり、2・4は孔より下側が無いが分銅形の可能性が高いと推定した。1・3は孔が中央より上側に穿たれている。神野氏からは1・2は、大型の部類に入り、類例は糸島の西方に近いと昨年5月にメールを頂いた。紡錘形では、6がⅡB類、7はⅡF類、8はⅡB・ⅡF類の中間、10・11はⅡG形、5はⅡH類の亜流、12は短軸方向に狭い溝を持つなど、九州地方同様にバリエーションに富む。

北陸地方の九州型石錘は、分銅形Ⅰ類の大型品で石材は凝灰岩が多く、安山岩もある。紡錘形Ⅱ類では、11・12は凝灰岩製、5・10は滑石製であり、九州地方の石材とも矛盾はないが、形状がやや異なる。6～8は土製なので小松市で製作されたのであろうか。これらは、筆者が確認した資料であり、当然見落としがある。今回、上野章氏から富山県でも他にⅠ類が1例あると教示を得た。また、Ⅱ類は見落とす可能性が高いので、この紹介を機に、見落とされた資料の洗い出しを行って頂ければ幸いである。

4．北陸地方の石錘

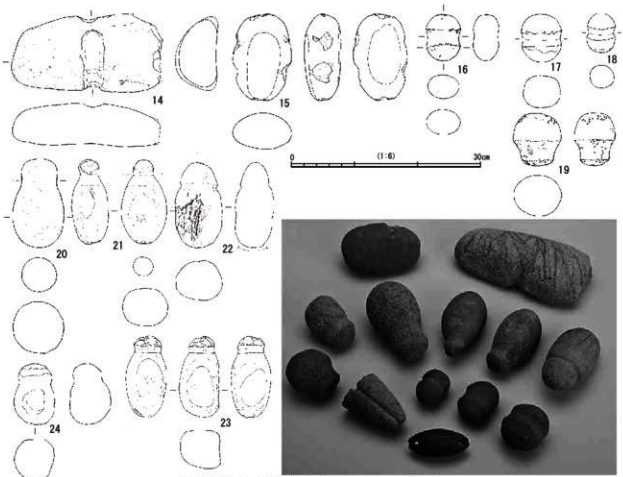
北陸地方では弥生～古墳時代の石錘は少ないが、第6図は金沢市駅西地区にある畝田・寺中遺跡で出土した弥生時代中期～古墳時代前期の石錘である。14・16～19は弥生時代中期、21～24は古墳前期とされた（安ほか2006）。14は短軸に幅広い溝を持ち、図右側が欠けている。2726ｇと重いことから、碇石の可能性もあろう。15は磨石を転用しているので縄文時代の石錘（安ほか2006b）とされたが、1kgを越えることや、側面に2個の切り込みを持つことから、縄文時代は難しいと判断した。16～18は短軸に幅広の溝を持つ瀬戸内型石錘である。19の頭部側面は丁寧に磨られており、上端部は55×45mmに敲打痕がある。下端は中央部に敲打痕を持ち、一部には磨り痕がある。瀬戸内型か中部型石錘の破片を敲打石に転用したのであろう。20～24は中部型石錘であり、長さ13～14cm前後に集中し、重量では615～735ｇに集中する。24は97mmと短くて512ｇと少ないが、20（浜崎ほか2005）は幅太なのと花崗岩の為か1246ｇと重い。土錘は32点が報告され、弥生時代中期1点、古墳時代前期3点、古墳時代中～後期3点である（安ほか2006a）。

北陸地方の九州型石錘一覧

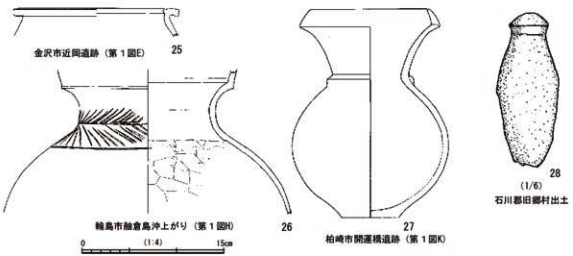
遺跡	番号	遺跡名	出土遺構	遺構・遺跡の時期	長さ	幅	厚さ	重量	石材	分類	備考
A	1	東小室キンダ	A1区包含層	古墳前期～後期	(122)	51	46	(620)	凝灰岩	Ⅰ類か	溝長50mm以上
B	2	福井ナカミチ	12年SX311	弥生後期後半～古代	(100)	72	62	(424.3)	凝灰岩	Ⅰ類か	孔径9mm、溝長88mm
C	3	小竹平	包含層	弥生後期後半～古墳中期	202	65		1100?	砂岩質	ⅠB類	溝長86mm
D	4	畝田・寺中	99年A3区SD58	古墳前期	(93)	68	52	(432)	細粒安山岩	Ⅰ類か	溝長84mm
D	5	畝田・寺中	99年C1区DS 8	古墳前期	92	42	38	203	滑石	Ⅰ類か	99年C1区SD16
F	6	八日市地方	13区C-9 旧河道	弥生中期	37	18	17	8.6	砂岩	ⅡB類	黒褐色フショク質砂
F	7	八日市地方	12区29.1-56.7	弥生中期	28.1	19.5		9.13	土製	ⅡF類	長軸5本
G	8	平面横川	3次北調査区包含層	弥生後期前半～後半	77	29		49.3	土製	ⅡB類か	長軸3本短軸2本の溝
I	9	定畑	SD02	南北朝	(98)	62	59		溶結凝灰岩	Ⅰ類か	溝長80mm以上
J	10	田伏玉作	包含層	古墳	72.4	41.7	25.6		滑石	ⅡG類	
L	11	五千石	3区包含層	古墳	39	15	13	5.9	凝灰岩	ⅡG類	流紋岩質
L	12	五千石	3区包含層	古墳	116	57	57	329	流紋岩	Ⅱ類か	
M	13	緑立	C地区包含層	古墳	(145)	55	55		安山岩	Ⅰ類か	溝長80mm以上
M		緑立	C地区包含層	古墳・古代	(102)	59	59		泥岩	Ⅰ類か	長軸溝、1/3、図なし

畝田・寺中遺跡の石錘一覧

D	14	畝田・寺中	02年N2区SD30	弥生中期	(242)	125.5	69	2726	凝灰角礫岩		上・両側面に幅広の溝
D	15	畝田・寺中	02年区DS7	古墳後期	138.5	93	58	1050.9	凝灰岩		砂岩質、両側面に切り込み2
D	16	畝田・寺中	99年C2区包含層	弥生中期	73	55	41	246	砂岩	瀬戸内型	
D	17	畝田・寺中	99年B2区SD16	弥生中期	61.5	46		169	凝灰岩	瀬戸内型	砂岩質
D	18	畝田・寺中	99年B2区SD16	弥生中期	76	63.5		170	凝灰岩	瀬戸内型	
D	19	畝田・寺中	00年C1区SD09	弥生中期？	83	75	65	537.1	凝灰岩	瀬戸内型？	
D	20	畝田・寺中	00年L2区河道	古墳前期～後期	1415	82	82	1246	花崗岩	中部型	00年L2区SD08
D	21	畝田・寺中	01年R1区DS8	古墳前期	134	73	58	615.4	凝灰岩	中部型	砂岩質01年R1区河道
D	22	畝田・寺中	99年B3区DN6	古墳	135	76	65	709.8	凝灰岩	中部型	99年B3区SD16
D	23	畝田・寺中	02年W区DN3	古墳	129	65	63	734.7	砂岩	中部型	02年W区SD59
D	24	畝田・寺中	99年A2区DS8	古墳前期	97	65	67	512	凝灰岩	中部型	99年A2区SD08

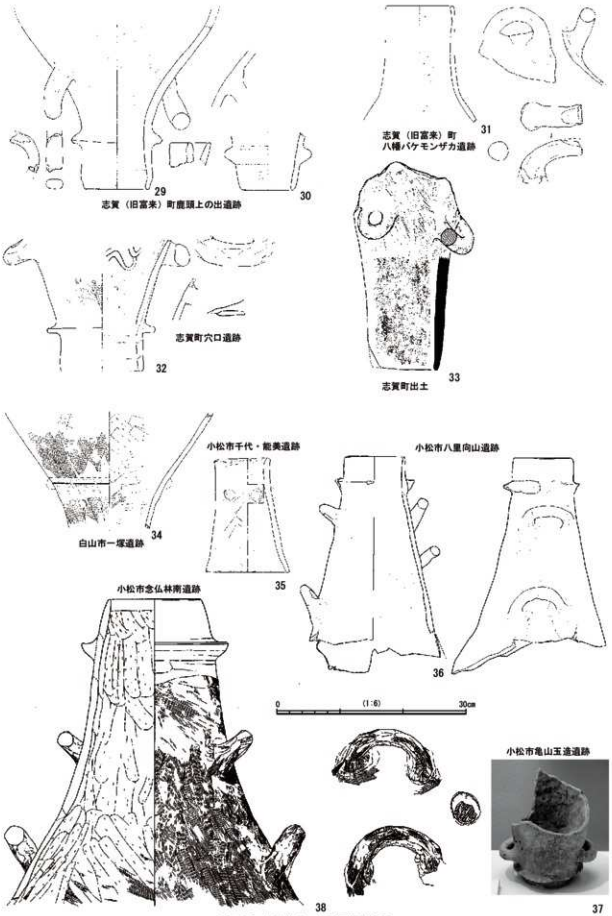


第６図　畝田・寺中遺跡の石錘（弥生中期～古墳前期）



第７図　北陸地方で出土した九州系土器など

弥生時代前期～中期後半の小松市八日市地方遺跡では、縄文時代の両端打欠石錘 29 点・切目石錘 1 点、瀬戸内型石錘 1 点、短軸に細溝 1 点、側面に紐掛痕 13 点、ⅡＢ類 1 点（６）、土錘は 100 点以上報告され、７がⅡ類である。（福海ほか 2003・下濱ほか 2013・2016）。弥生時代後期の平面梯川遺跡では土錘 30 点と８が報告された（浜崎 1995・川畑ほか 1998）。土錘は新しい時期を含む可能性があるが、石錘の出土例は少ない。中部型は畝田・寺中遺跡でサイズがまとっまているが、時期不詳の大型中部型石錘（28 石川郡旧郷村、橋本 1975）と能登半島海上がりが確認される。



第８図　北陸地方の山陰系甑形土器

5．山陰系甑形土器について

山陰系甑形土器は、近年土製煙筒（崔 2010）と集成されたが、石川県が抜けており、現在は第８図がある。能登地方では、志賀町鹿頭上の出遺跡 29・30（久田ほか 1989、弥生時代後期後半～末）、志賀町八幡バケモンザカ遺跡 31（松田ほか 2000、弥生時代後期後半～末）、志賀町穴口遺跡 32（宮川ほか 2004）、志賀町出土地不明 33（志賀町役場 1974）がある。加賀地方では、白山市一塚遺跡 34（前田 1995、弥生時代後期末）、小松市内には千代・能美遺跡 35（林ほか 2012、古墳時代前期）、八里向山遺跡 36（望月ほか 2004、弥生時代後期末）、亀山玉造遺跡 37、念仏林南遺跡 38（樫田ほか 1994、弥生時代後期末）がある。能登半島西岸と小松市に多く確認される。33 は埴輪とされていたが昨年秋に七尾市教育委員会職員の指摘により山陰系甑形土器と認識された。31 は顎部が長すぎることや取手が厚すぎることなどから、山陰系甑形土器と判断した。

6．まとめにかえて

九州型石錘ⅠＢ類３は、林田・中尾 2011 では唐津湾に類例があり、２・４は糸島半島西部か唐津湾の可能性が想定される。ⅡＢ類６は、弥生時代中期から壱岐・早良平野で確認され、後期では壱岐・唐津～博多湾東部に確認される。神野氏は１・２を糸島より西側だが、典型的な事例とは異なるので山陰地方で作られた可能性を指摘された。石錘は、カラー画像などでの石材の比較検討を行ない、産地を特定する必要があろう。

北陸地方の九州系遺物は、縄文時代後期末～晩期前半に結晶片岩様緑色岩製の玉類、晩期末に夜臼系赤塗技法と夜臼系土器、弥生前期の層灰岩製片刃石斧（佐藤・宮田 2018）、弥生中期の甕（第７図 25、谷内尾ほか 1985）、後期の下大隅式壺（第７図 27 新潟県立歴史博物館 2013）が報告されている。

山陰系遺物は、弥生時代前～中期には抉入柱状片刃石斧が想定され、弥生時代中期後半以降に搬入土器や土器の影響が強くなり、後期以降は有段甕の採用から山陰色をより強くする。山陰系甑形土器は、弥生時代後期後半～古墳時代前期の 10 個体確認され、山陰系甑形土器は福岡県前原市潤地頭給遺跡でも出土している。

これらは、陸路よりも舟・船でもたらされた可能性が高く、北部九州地方と北陸地方の中間には、鳥取市青谷上寺地遺跡があり、弥生中期に小松産の碧玉による管玉生産を行なっていた。弥生時代中期前葉～後葉の唐津市中原遺跡・宇木汲田遺跡には小松産の管玉が多く出土しているのは、青谷上寺地遺跡が関係した可能性が高い（河合ほか 2013）。

北陸地方では、沖合から海揚がりの土器の一部が報告されている。京都府経ヶ岬沖合の浦島礁付近と福井県三国港沖合の玄達瀬付近では、弥生時代中期中葉の土器が最古であり、弥生後期～古墳時代前期の壺・甕がある（堀 2013）。石川県輪島市舳倉島沖上がりの古墳前期山陰系壺（小嶋・高田ほか 1985）や、能登半島で引き上げられた中部型石錘がある。新潟県では、新潟市角田山沖海底から縄文時代中期中葉馬高式深鉢（寺崎 2014）、佐渡近海から弥生時代前期末～中期初頭の壺（渡邊 2015）、他に弥生後期の土器・古式土師器などが報告されている。

このように、北部九州地方・山陰地方と北陸地方の交流は、点と点を繋ぐ要素が福井県～新潟県内で確認されるが、その実態に迫ることは難しい。よって、報告済み資料（九州型石錘Ⅱ類など）の再評価、未報告資料の提示（堀 2013 など）などを行うことで、その様相の一端を明らかに出来ると思われる。

本稿をまとめるにあたり、赤澤徳明、池田　拓、伊藤雅文、上野　章、岡田一広、下濱貴子、神野晋作、高田秀樹、林　大智、藤田慎一、松田睦夫、渡邊朋和の協力を得た。

参考文献

樫田　誠　1994 『念仏林南遺跡Ⅰ』小松市教育委員会

加藤由美子ほか　2011 『五千石遺跡　1区・3区・4区東地区・5区』長岡市教育委員会

河合章行ほか　2013 『日本海を行き交う弥生の宝石』鳥取県埋蔵文化財センター

川畑　誠ほか 『福井ナカミチ遺跡』石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター

久々忠義　1992 「大島町荒畑遺跡の九州型石錘」『大境第14号』富山考古学会

小嶋芳孝・高田秀樹ほか　1985 『舳倉島・七ツ島（大島）遺跡詳細分布調査報告書』輪島市教育委員会

黒埼町　1998 『黒崎町史　資料編一　原始・古代・中世』

佐藤由紀男・宮田　明　2018 「石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究259号　第65巻3号』考古学研究会

志賀町役場　1974 『志賀町史　資料編第一巻』

下濱貴子・宮田　明　2013 『八日市地方遺跡Ⅱ　第1・2部』小松市教育委員会

下濱貴子ほか　2016 『八日市地方遺跡Ⅱ　第5・6・7部』小松市教育委員会

関　雅之　1972 『田伏玉作遺跡』糸魚川市教育委員会

崔　栄柱　2010 「三国・古墳時代における土製煙筒研究－韓半島と日本列島を中心に－」『立命館大学考古学論集Ⅴ』立命館大学考古学論集刊行会

寺崎裕助　2014 「新潟市西蒲区角田山沖発見の縄文土器」『新潟市文化財センター年報第1号』新潟市文化財センター

新潟県立歴史博物館　2013 『弥生時代のにいがた』

橋本　澄夫　1975 「考古学から見た能登半島－弥生時代編－」『能登の文化財第三輯』能登文化財保護連絡協議会

浜崎悟司ほか　1995 『平面梯川遺跡Ⅰ』(社) 石川県埋蔵文化財保存協会

浜崎悟司ほか　2005 『畝田西遺跡群Ⅱ』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

林　大智ほか　2012 『千代・能美遺跡』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

久田正弘ほか　1989 『鹿頭上の出遺跡』富来町教育委員会

福海貴子ほか　2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会

堀　大介　2013 『海は語る　ふくいの歴史を足元から探る』越前町教育委員会

本田秀生・松山温代　1998 『東小室ボガヤチ遺跡・東小室キンダ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

前田清彦　1995 『旭遺跡群Ⅰ　一塚遺跡』松任市教育委員会

松田睦夫ほか　2000 『富来城跡』富来町教育委員会

望月精司ほか　2004 『八里向山遺跡群』小松市教育委員会

宮川勝次ほか　2004 『穴口遺跡・穴口貝塚』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

安　英樹ほか　2006a 『畝田西遺跡群Ⅲ』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

安　英樹ほか　2006b 『畝田西遺跡群Ⅳ』石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

谷内尾晋司ほか　1985 『北安江遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

山本信一　1985 『小竹ガラボ山古墳・小竹平遺跡』鹿島町教育委員会

渡邊朋和　2015 「佐渡近海発見の弥生土器」」『新潟市文化財センター年報第2号』新潟市文化財センター

石川県埋蔵文化財情報
第43号

発行日　2020（令和２）年９月30日

発行　公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
TEL　076-229-4477　FAX　076-229-3731
URL　https://www.ishikawa-maibunn.or.jp
E-mail address　daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　前田印刷㈱

©（公財）石川県埋蔵文化財センター